

お茶の水女子大学 SDGs 推進研究所

2025 年度 事業報告書



Ochanomizu Univ.
Institute for SDGs Promotion

はじめに

2025 年度は、お茶の水女子大学 SDGs 推進研究所にとって、「生活者起点の SDGs」という理念を、研究・教育・学生の活動、そして社会との連携を通じて、さらに具体的な形へと展開した一年となりました。

SDGs が掲げる持続可能な社会の実現には、環境、健康、食、教育、ジェンダー、地域社会など、さまざまな課題を個別に捉えるだけでなく、それらが相互に関わり合っていることを理解し、多様な知を結びつけていくことが重要です。本年度も、本学の多様な専門分野を生かした研究が進められ、SDGs の達成に貢献しうる幅広い研究成果が生み出されました。

また、企業との共同講座、台北医学大学との国際的な連携、地域や自治体との協働、公開シンポジウムやアウトリーチ活動などを通して、大学の知を社会と共有し、新たな対話や連携を生み出す機会が数多く設けられました。とりわけ、創立 150 周年を記念して開催した「災害レジリエントな社会の実現に向けて～避難生活の質の向上を目指す～」では、持続可能な社会を考えるうえで不可欠な「誰一人取り残さない」という視点を、災害という具体的な課題から考える場となりました。

そして、本研究所の活動において、学生の存在はますます大きくなっています。OCHA・SDGs 学生委員会では、企業、大学、行政、NPO、附属学校園など、多様な主体との連携のもと、学生自身が課題を見つけ、考え、行動するプロジェクトが展開されています。こうした主体的な活動は、SDGs を自分ごととして捉え、次の世代へつないでいく大切な取り組みと言えます。

SDGs の達成期限である 2030 年に向け、持続可能な社会の実現には、なお多くの課題が残されています。だからこそ、大学が有する多様な知と、多様な人々との対話を結びつけ、新たな価値を創出していくことが求められています。本学には、自然科学、人文科学、社会科学、生活科学、教育など、幅広い専門性があります。それらを横断し、研究と教育をつなぎ、さらに社会との共創へと発展させていくことが、本研究所の重要な役割です。

2025 年度の活動が、その一步一步を積み重ねたものであったことを、本報告書を通して感じていただくことができましたら幸いです。この一年の成果を次の活動へとつなげながら、「生活者起点の SDGs」をさらに深化させ、持続可能な社会の実現に向けて、本研究所はこれからも歩みを進めてまいります。

最後に、本年度の活動にご理解とご協力を賜りました学内外の皆様、研究・教育・学生活動に携わった皆様に、心より感謝を申し上げます。

2026 年 3 月 31 日

サステイナブル社会実装機構長 相川京子

2022年4月に設立されたSDGs推進研究所の4年目となる2025年度の実施事業について、ここにご報告申し上げます。

本学のSDGs研究・教育の特徴は、生活者の視点に立脚している点にあります。国立の女子大学として長年培ってきた生活科学研究を基盤とし、本学独自のSDGs研究・教育を展開してまいりました。本研究所は、これらの研究・教育を集約し、教職員・学生・附属学校園、さらには企業・他大学・地域と連携しながら特色あるSDGs活動を推進する役割を担っています。学内外の結節点として機能し、すべての人々がSDGsに貢献できる仕組みづくりの創造を目指しております。

2025年度の事業は、これまでに蒔かれた種を芽吹かせ、丁寧に育てることを心がけて実施いたしました。例えば、株式会社セブン&アイ・ホールディングス、附属学校園、OCHA-SDGs学生委員会と共同で行っているフードドライブ事業では、家庭にある食品を持ち寄り必要とする方々に届ける活動を継続しております。「おすそ分け」をコンセプトに、附属学校園との共同実施という利点を生かし、大学生が小学生に「受け取る人の気持ちを想像する」「食品ロスの問題を考える」といった視点を伝える時間を設け、教育的要素を加えた取り組みへと発展させています。

また、2025年に本学と協定を締結したサントリーホールディングス株式会社との共同講座「企業から学ぶサステナビリティー水とペットボトル・サントリーを事例としてー」を開催し、これを契機に学生有志によるペットボトルの水平リサイクル活動「リ茶イクル〜私たちから始めるちょっとしたリサイクル〜」が誕生しました。本活動は2026年4月以降、学内で展開されています。さらに地域との連携として、北区と学生委員による「食品ロス削減に向けた協働プロジェクト」が開始され、「北区版食べきり協力店（仮称）」制度の提案に至りました。

年度末には、創立150周年記念公開シンポジウム「災害レジリエントな社会の実現に向けて〜避難生活の質の向上を目指す〜」を開催し、本学の生徒・学生・教職員のみならず、企業や地域の方々にも多数ご参加いただき、盛会のうちに終了いたしました。

年間を通じて数多くの事業が行われていますが、その多くにOCHA-SDGs学生委員会が関わっています。2025年度は学生委員により8つのプロジェクトが立ち上がり、学生が生活者起点で感じた社会課題の解決を目指す取り組みが行なわれています。研究所ウェブサイトの詳細を掲載しておりますので、学生の社会課題へのアプローチをぜひご覧ください。

2026年度は、これまでの研究・教育・産官学連携を確実に発展させ、本学ならではのSDGs活動をさらに推進してまいりたいと考えております。

引き続き、皆様のご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2026年3月31日
SDGs推進研究所長 斎藤悦子

【 目 次 】

はじめに

I. SDGs 推進研究所 2025 年度事業概要	1
1. 研究所の概要	
2. 2025 年度構成メンバー	
3. 2025 年度事業概要	
II. 研究部門	5
1. 2024 年度研究助成・教育助成 成果報告会	
2. 2025 年度研究助成	
3. SDGs 関連研究成果	
(1) 論文一覧	
(2) 著書一覧	
(3) 学会等活動	
(4) 獲得した外部資金	
(5) 企業との共同研究	
(6) 特許	
III. 教育部門	32
1. サントリーグループとの共同講座開催	
(1) サントリーグループ・SDGs 推進研究所共同講座「企業から学ぶサステナビリティ水とペットボトル・サントリーを事例として」の開催	
(2) 講演会「限りある資源との向き合い方ーサントリーのサステナビリティ経営から読み解くー」の開催	
(3) サントリーグループ・SDGs 推進研究所合同企画「BtoB（ボトル to ボトル）リサイクルチャレンジ！！＝日常の、ちょっとした工夫で、CO ₂ を減らそう！＝」の開催	
2. 保育マネジメント研究会との連携教育	
IV. 企画調整部門	
1. シンポジウム・セミナーの開催	36
(1) 台北医学大学との国際カンファレンス開催	
(2) 150 周年記念シンポジウム開催	
2. 産学連携	39
(1) mottECO 普及イベントにてブース出展	
(2) 食品ロス削減全国大会にてブース出展	

(3) サントリーホールディングス株式会社と産学連携を通じた持続可能な社会に向けた連携協定を締結	
(4) サントリーグループとの共同講座開催	
3. 地域連携	44
(1) 文京区クールアースフェア 2025 に出展	
(2) 文京区内大学サステナビリティ関連取組のための交流・意見交換会参加	
(3) 食品ロス削減に向けた北区との協働プロジェクト	
(4) 「あらぶんちょメタバースフェスタ」出展	
4. 国際連携	50
(1) 台北医学大学との国際カンファレンス開催	
5. 附属学校園との連携	51
(1) フードドライブ	
(2) こども雑穀祭りの開催	
(3) お茶大ポケット・ガーデン創生プロジェクト	
6. アウトリーチ活動	55
7. 学内 SDGs 推進活動	68
(1) THE インパクトランキングエントリー	
(2) SDGs 認知度調査	
V. 学生委員の活動	71
1. Sustainability Week 2025 開催	
2. 干し芋の残渣活用のための意見交換会を開催	
3. シェアリングサービスプロジェクト おゆずりフェス開催	
4. 文京区クールアースフェア 2025 に出展	
5. 文京区内大学サステナビリティ関連取組のための交流・意見交換会へ参加	
6. mottECO 普及イベントにてブース出展	
7. 徽音祭出店	
8. フードドライブ活動	
9. おにぎりアクション 2025 参加	
10. マイボトルを持とうプロジェクト ウォーターサーバーサービスの展開	
11. 手話べりプロジェクト 勉強会開催	
VI. 広報	84
1. 学外広報	
(1) 農林水産省の Web マガジン「aff (あふ)」	

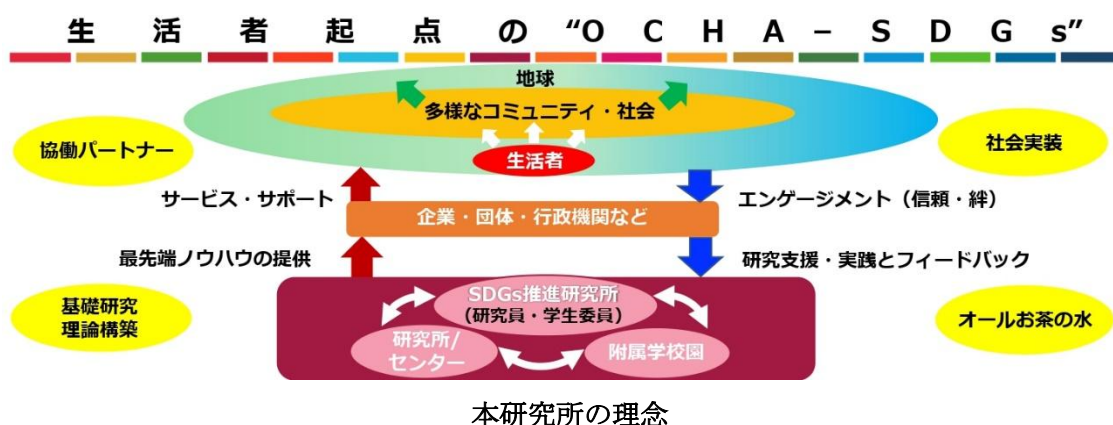
【資料】

- ① 国立大学法人お茶の水女子大学 SDGs 推進研究所規則
- ② 国立大学法人お茶の水女子大学 SDGs 戦略会議規則
- ③ 各種イベント・案内ポスター
- ④ 2025 年度 SDGs 認知度調査 結果のまとめ (※PDF ファイルのみ)

I. SDGs 推進研究所 2025 年度事業概要

1. 研究所の概要

2022 年度に発足した本研究所は、相川京子副学長を新たに機構長に迎え、本年度事業を開始した。所長 斎藤悦子教授、副所長 荒木美奈子准教授、事務局長 和久健司特任准教授は前年度からの続投となった。研究員に変更はなく(退職者除く)、本学における SDGs 推進活動の理念「生活者起点の SDGs」を一層充実させるため、研究部門・教育部門・企画調整部門において、SDGs 達成に貢献し得る研究・教育を推進した。また、22 年度に発足し、24 年度からプロジェクト別活動体制に移行した学生組織「OCHA-SDGs 学生委員会」の活動支援を強化した。企業や他大学、官公庁、NPO 法人、附属学校園その他教育機関と連携した多種多様な SDGs に関する学生プロジェクトチームが精力的に活動した。



2. 2025 年度構成メンバー

2025 年度構成メンバー（部門長及びスタッフ）

本学における職位等		氏名	専門分野
機構長	副学長	相川 京子※	生化学 糖鎖生物学
研究所長	教授	斎藤 悦子※	生活経済学 生活経営学
副研究所長 研究部門長	准教授	荒木 美奈子 ※	国際協力学
プロジェクト管理者 企画・調整部門長	特任准教授	和久 健司※	英語教育 経営学
教育部門長	教授	刑部 育子※	保育学
特任教員	特任リサーチフェロー	河寄 唯衣	公衆栄養学
	特任アソシエイトフェロー	溝添 倫子	環境工学
客員教授		小中 鉄雄	国際協力学
客員研究員		菊池 淳子	国際協力学
研究協力員		有友 愛子	家庭科教育
事務局	アカデミック・アシスタント	後藤 奈美	
	アカデミック・アシスタント	伊藤 千草	

※は運営委員を兼ねる

2025 年度構成メンバー（研究員等）（五十音順）

本学における職位等		氏名	専門分野
学内研究員	教授	赤松 利恵※	公衆栄養学
	教授	市 育代	栄養化学
	教授	植村 知博	植物細胞生物学
	教授	近藤 恵	自然人類学
	教授	須藤 紀子	公衆栄養学
	教授	長澤 夏子	建築計画学
	教授	新田 陽子	調理科学
	教授	長谷川 直子※	自然地理学 陸水学
	教授	浜野 隆	教育開発学 比較国際教育学
	教授	森光 康次郎	食品化学
	教授	矢島 知子	有機化学
	教授	由良 敬	生物物理学
	准教授	五十嵐 悠紀	情報通信
	准教授	河合 英徳	建築環境工学
	准教授	新實 五穂	服飾史
	准教授	藤山 真美子	デザイン工学
	講師	神山 翼	気象学
	講師	佐藤 瑤子	給食経営管理
	助教	雨宮 敏子	材料物性
	助教	野田 響子	食品貯蔵学
運営委員会委員	教授	清本 正人	発生生物学 海洋生物学
	准教授	佐藤 敦子	環境発生進化学

※は運営委員会委員を兼ねる

3. 2025 年度事業概要

研究部門では 2024 年度研究助成を行った 8 名の学内教員の成果報告会(pp.5-10 参照)を開催すると共に、2025 年度におけるプロジェクト研究助成(p.11 参照)を企画し、応募のあった 6 件から選抜した 5 件の学内教員による研究を助成した。

教育部門では、サントリーグループとの共同講座を開催した。(本学とサントリーホールディングス株式会社は 2025 年 12 月 17 日に産学連携を通じた持続可能な社会の実現に寄与することを目的に連携協定を締結した。) また、保育マネジメント研究会が主催する「第 10 回お茶大こどもフォーラム」において本研究所は後援として携わった。

企画調整部門では、本学の学生及び教職員を対象とした SDGs 認知度調査を実施し、SDGs の認知度と参画意識に関する新たな集計結果を取りまとめた刊行物と OCHA・SDGs 学生委員会の 2024 年度の活動をまとめた活動報告書を作成した。

2022 度からエントリーしている「THE インパクトランキング」へは、2024 年度に続き GOAL 5 (ジェンダー平等を実現しよう) 国内 1 位となった結果を確認するとともに、本年度も本学の業績を収集したデータを基にエントリーした。

研究所主体の催し物としては、お茶の水女子大学創立 150 周年記念公開シンポジウム「災害レジリエントな社会の実現に向けて～避難生活の質の向上を目指す～」を開催した。また、国際的な取組として台北医学大学との国際カンファレンスに参加した。

地域連携の推進においては、東京大学をはじめとする区内大学、文京区及び都内関連企業との活動や意見交換会に参加した。さらに、東京都北区と協働し、食品ロス削減に向けた意識向上及び消費者の食べ残し削減等の取組を促進するための事業案の検討を行った。

II. 研究部門

1. 2024 年度研究助成・教育助成 成果報告会

2024 年度の研究助成・教育助成採択者による研究成果報告会を 3 回に分け開催した。本研究助成・教育助成は、個人研究、学内外の研究者との共同研究、企業や他機関との共同研究などを対象に、本学の SDGs 研究を牽引する研究を発掘し、SDGs に資する研究活動を活性化させることを目的とし実施した。

開催概要

2024 年度 SDGs 研究助成 成果報告会	
日時	2025 年 6 月 11 日（水）13：20～14：10 2025 年 6 月 18 日（水）13：20～14：50 2025 年 6 月 25 日（水）13：20～14：10
開催方式	対面開催
会場	共通講義棟 1 号館 102 室（第 1 回・第 2 回） 本館 113 室（第 3 回）
参加者	各回 9～20 名（本学学生・教職員）

<2024 年度第 1 回 SDGs 研究助成 成果報告会>

【日時】2025 年 6 月 11 日（水）13：20～14：10

【会場】共通講義棟 1 号館 102 室（対面開催）

【報告タイトル、報告者】

第 1 報告：「新規ビタミン D 誘導体の殺鼠剤への応用：陸上の生態系を守るため」
（棚谷綾先生；理学部化学科）

第 2 報告：「フッ化物イオン二次電池におけるセリウムフッ化物系固体電解質の開発」
（近松彰先生；理学部化学科）

【発表概要】

第 1 報告

タイトル：「新規ビタミン D 誘導体の殺鼠剤への応用：陸上の生態系を守るため」

研究者名：棚谷 綾（基幹研究院 自然科学系 教授）

影近 弘之（東京科学大学総合研究院生体材料工学研究所 教授）

長岡 慧（大丸合成薬品株式会社 代表取締役社長）

概 要：

ネズミは人間社会に対して衛生的問題、都市機能の阻害、経済的被害など、甚大な影響をもたらし、その駆除には殺鼠剤が有効である。しかし、抵抗性ネズミの出現や、二次毒性による標的外生物の中毒が大きな問題であり、代替製剤の開発が急務である。私たちは高

いビタミン D 活性を持つ新規リトコール酸誘導体 Dcha-20 を創製し、本化合物が殺鼠活性を有することを見いだした。本講演では、Dcha-20 の構造と機能、殺鼠剤としての応用の可能性について概説する。

第 2 報告

タイトル：「フッ化物イオン二次電池におけるセリウムフッ化物系固体電解質の開発」

研究者名：近松 彰（基幹研究院 自然科学系 准教授）

概 要：

現在スマートフォンから電気自動車まで幅広い機器にリチウムイオン二次電池が利用されている。しかし、リチウムの発火リスクや地政学的な懸念から、リチウムに代わる元素を用いた全固体二次電池の開発が求められている。その中で最近、リチウムに代わりフッ素を利用した全固体二次電池が注目されている。フッ素はリチウムの埋蔵量と比べてはるかに豊富であり、フッ素含有鉱石は世界中の至るところで採掘できる。また、フッ素を用いた全固体二次電池は、理論重量エネルギー密度と理論体積エネルギー密度がいずれも高いため、電池の軽量化および小型化が実現できる。このように、フッ化物イオン全固体二次電池には産業構造の変革において大きな可能性を秘めているが、充放電特性の不良や動作温度の高さなど、実用化に向けて多くの課題が存在する。そのため、新材料の探索を含むさらなる基礎研究が求められている。本研究では、フッ化物イオン全固体二次電池の固体電解質としてセリウムフッ化物に注目し、これらの単結晶薄膜を合成する手法を確立した。講演では、確立したセリウムフッ化物単結晶薄膜の合成手法を紹介し、作製した薄膜のイオン伝導特性に関する結果を報告する。

<2024 年度第 2 回 SDGs 研究助成 成果報告会>

【日時】2025 年 6 月 18 日（水）13：20～14：10

【会場】共通講義棟 1 号館 102 室（対面開催）

【報告タイトル、報告者】

第 1 報告：「緑藻マリモの保全研究と附属中学校生徒の研究意欲向上に重要な実習内容」

（畠田智先生；理学部生物学科）

第 2 報告：「知的障害者を対象としたダンスプログラム（ID ダンス）の開発」

（水村真由美先生；文教育学部芸術・表現行動学科）

第 3 報告：「基礎研究に基づく強相関電子系の未解明領域の探求とその革新的応用」

（古川はづき先生；理学部物理学科）

第 4 報告：「安価な小型飛跡検出器の開発」

（河野能知先生；理学部物理学科）

【発表概要】

第1 報告

タイトル：「緑藻マリモの保全研究と附属中学校生徒の研究意欲向上に重要な実習内容」

研究者名： 畠田 智（基幹研究院 自然科学系 教授）

若菜 勇（釧路市役所 都市経営課 世界自然遺産推進室 室長）

相川 京子（前 附属中学校 校長）

植竹 紀子（サイエンス&エデュケーション研究所 特任講師）

概 要：

緑藻マリモは、環境省レッドリストでは絶滅危惧Ⅰ類に、文化庁からは国の特別天然記念物に指定されています。一方で、マリモはお土産などで馴染みがある藻類です。そこで本研究では、絶滅に瀕しているが知名度の高いマリモを用いることで、SDGs 目標 15[陸の豊かさを守ろう]と目標 4[質の高い教育をみんなに]の達成に貢献できると考えました。保全研究では、小型マリモから大型マリモに成長する際に位置する水深別・層別のマリモの光合成特性を解析し、光環境への適応を調査しました。また、附属中学校生徒へのマリモを用いた実習では、事前・事後アンケートと半構造化面接により、科学研究への意欲やSDGs の自分ごと感が向上したか調査しました。本成果報告会では、マリモの光合成活性に関する解析結果と、中学生にとって効果的な実習内容に関して報告させていただきます。

第2 報告

タイトル：「知的障害者を対象としたダンスプログラム（ID ダンス）の開発」

研究者名：水村真由美（基幹研究院 人文科学系 教授）

高橋 将（大東文化大学健康スポーツ科学部 講師）

濱名 智男（日本文化大学法学部 教授）

杉山 りん（お茶の水女子大学大学院博士後期課程院生）

概 要：

本研究は、SDGs「すべての人に健康と福祉を」を直接的に実現し、運動を通じた「質の高い教育をみんなに」「人や国の不平等をなくそう」といった視点から、知的障害者が実施可能かつ運動効果が期待されるダンスプログラムを開発することを目的とした。なお知的障害者の運動機能に関しては、先行研究がほとんどなく、運動実施に関わる課題に不明な点が多いことから、ダウン症者を含む知的障害者の運動機能を調査することにより、運動機能の中でも特に改善が求められる要素を抽出した。本研究では、知的障害者が行う柔道（ID 柔道）のウォーミングアップとして導入可能なダンスプログラム（ID ダンス）を想定し、プログラム開発と現場での活用を試みた。なお身体活動量の増加は、化石燃料を用いた交通機関での移動減少に繋がることから近年 WHO を中心とした健康福祉分野において「気候変動に具体的な対策」になるとも言われている。

第3 報告

タイトル：「基礎研究に基づく強相関電子系の未解明領域の探求とその革新的応用」

研究者名：古川はづき（基幹研究院 自然科学系 教授）

Edward Forgan（英国バーミンガム大学 名誉教授）

Elizabeth Blackburn（スウェーデン ルンド大学 准教授）

Vasyl Ryukhtin（チェコ チェコ科学アカデミー研究所 研究員）

Robert Cubbit（フランス ラウエ・ランジュバン研究所 研究員）

Sebastian Mühlbauer（ドイツ ミュンヘン工科大学 研究員）

Edward Foley（理化学研究所 CEMS SCSRT 技師）

Minoru Soda（お茶の水女子大学）

概 要：

強相関電子系の研究は、エネルギー変換材料や電子デバイスの基盤技術として重要です。たとえば、超伝導技術はクリーンエネルギーや量子コンピュータの実現に、ス킬ミオンの研究は省エネルギー型磁気デバイスの開発に貢献すると期待されています。我々は、令和6年度には、空間反転対称性が破れた超伝導体 LaNiC_2 を用いて、理論的に予言されていた新しい「ヘリカル磁束相」の実証に挑みました。そして、フランスのラウエ・ランジュバン研究所にある世界最高性能の中性子小角散乱装置 D33 を用いた実験により、その存在を世界で初めて実証することに成功しました。このヘリカル磁束相は、非対称な結晶構造に起因する局所電場と磁場の相互作用によって現れるものです。実験では、磁場を強くするほど構造の歪みが大きくなることも確認されました。今後はこの相の特性解明をさらに進め、超伝導の理解を一層深めていく予定です。

第4 報告

タイトル：「安価な小型飛跡検出器の開発」

研究者名：河野能知（基幹研究院 自然科学系 准教授）

概 要：

素粒子物理の実験で使う粒子検出器は、これまで X 線撮像素子や高感度な光センサとして医療や様々な科学計測に応用されてきました。粒子検出器の中でも荷電粒子の飛跡を可視化することを目的としたもの（飛跡検出器）に半導体検出器があり、現在でもセンサの微細化、高速なデータ収集、放射線耐性の強化などの面で開発が行われています。ただし、半導体製造業者による特注品で高価ということもあり、高い性能が要求される部分に利用が限定されている状況です。本研究では高性能な検出器の開発ではなく、 1mm^2 程度の位置分解能をもつ飛跡検出器を安価に製作し、実験室での利用を広く実現することを目指しています。安価な部品を用いて多チャンネル読み出し基板を実装、検出器全体の設計、開発の現状について紹介します。

<2024 年度第 3 回 SDGs 研究助成 成果報告会>

【日時】 2025 年 6 月 25 日（水） 13：20～14：10

【会場】 本館 113 室（対面開催）

【報告タイトル、報告者】

第 1 報告：「『食』の体験を通した持続可能性のための幼児教育実践研究：『食』の未来を
考える素材としての『雑穀米』に着目して」

（刑部育子先生；生活科学部人間生活学科）

第 2 報告：「途上国におけるトイレ排水処理による病原リスク除去能力の実態」

（大瀧雅寛先生；共創工学部 人間環境工学科）

【発表概要】

第 1 報告

タイトル：『食』の体験を通した持続可能性のための幼児教育実践研究：『食』の未来を
考える素材としての『雑穀米』に着目して」

研究者名：刑部 育子（基幹研究院 人間科学系 教授）

宮里 暁美（お茶大アカデミック・プロダクション・寄附講座教授

（元お茶大こども園園長、現お茶大こども園特別アドバイザー）

内海 緒香（人間発達教育科学研究所 特任准教授）

光橋 翠（お茶大 基幹研究院 研究員）

概 要：

雑穀は高い栄養価や機能性などの利点、広い環境適応能力を有することから、持続可能な作物として、世界の食料安全保障と飢餓の解消に大きな役割を果たすことが期待されており、国連が 2023 年を「国連雑穀年」として設けるなど、SDGs を推進する作物として注目されています。本研究では、持続可能な社会づくりに貢献する乳幼児教育における素材として、雑穀米にどのような可能性があるかについて、お茶大こども園の食の教育実践を通して検討しました。実践を通して園児・保育関係者・保護者が雑穀米について興味関心をもち、考える過程で、雑穀が SDGs の目標 2「飢餓をゼロに」、目標 3「すべての人に健康と福祉を」、目標 13「気候変動に具体的な対策を」の達成に貢献する作物であること、日本の食・文化・自然の多様性を支えてきた雑穀を多面的に体験することで自然の多様性に気づくことにより、本取組が目標 15「陸の豊かさを守ろう」の達成にも貢献する地球的課題への学びにもつながることが示唆されました。本研究は、目標 4「質の高い教育をみんなに」のターゲット 4.7「全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする」に資する実践となりました。これらの実践研究の成果は『雑穀米：文京区立お茶の水女子大学こどもうれしい＊おいしいプロジェクト』にまとめられました。

第 2 報告

タイトル：「途上国におけるトイレ排水処理による病原リスク除去能力の実態」

研究者名：大瀧雅寛（基幹研究院 自然科学系 教授）

Tushara Chaminda G.G.（スリランカ国立 Ruhuna 大学工学部 教授）

概 要：

途上国の多くの地域では水道整備に付随して水洗トイレの普及が進んでいるが、下水道の整備は進まずトイレ排水は家庭毎に設置される個別排水処理で対応している。しかし非水洗型（Pit latrine）の処理にて水洗トイレ排水を処理しているため、十分な処理時間を経ずに周辺土壌へと放出浸透している状況となっており、SDGs 項目 6「安全な水とトイレを世界中に」の目標達成の阻害となっていると考えられる。本研究はスリランカ国を対象とし、個別トイレ排水処理周辺土壌中の糞便由来微生物指標を調べることで病原リスクの拡散状況を把握し、適切な処理システムを提案することを目的としている。スリランカ国南部 Galle 地域の 4 か所の個別トイレ排水処理の周辺土壌を用いた調査研究の結果、下水道未整備地域においては SDGs 項目 6「安全な水とトイレを世界中に」の達成には水洗トイレ対応の Septic tank の導入が重要であることを微生物指標の測定結果から確認することができた。ただしウイルスに関してはデータ不足であり、そのためには土壌からのウイルス指標検出率の向上が不可避であった。今回、土壌中の水分量および結合水の関与を調査したが、これらの関与は小さいことが示された。

2. 2025 年度研究助成

昨年度に引き続き、個人研究・学内外の研究者との共同研究、企業や他機関との共同研究などを対象に、本学の SDGs 研究を牽引する研究を発掘し SDGs に資する研究活動を活性化させることを目的とした研究助成を行った。

昨年度同様、対象者は全学教員（特任教員を除く）。SDGs 推進研究所の趣旨・目的に沿った研究に対して、1 件あたり 50 万円を上限に募集した。本年度は 6 件の応募があり、下記の 5 件が採択された。

採択された課題研究

所属	代表者名	研究課題タイトル	関連する主な SDGs ゴール
基幹研究院 人間科学系	刑部 育子	日本ならではの「食」の体験を通した持続可能性のための幼児教育研究（その②）：「雑穀」から広がる食育実践とキャンパス緑化	2、3、4、13、 15、17
基幹研究院 自然科学系	近藤 敏啓	次世代高容量蓄電池の実用化に向けた開発指針獲得に向けて	7
基幹研究院 自然科学系	畠田 智	緑藻マリモの保全研究とマリモ実習での附属小児童の探求意欲向上・連続的でスムーズな科学研究教育システムの構築	4、15
基幹研究院 自然科学系	清水 誠	植物性たんぱく質の付加価値向上を目指した大豆たんぱく質の機能性に関する研究	2、3、13
基幹研究院 自然科学系	棚谷 綾	新規ビタミン D 誘導体の殺鼠剤としての実用性の検証：陸上の生態系を守るために	11、15

研究者名：刑部育子・宮里暁美・内海緒香・光橋翠

研究課題名：日本ならではの「食」の体験を通じた持続可能性のための幼児教育研究（その②）：「雑穀」から広がる食育実践とキャンパス緑化

○成果の内容

雑穀は環境適応力が高いため、世界の食糧危機を救うと期待されており、国連が 2023 年を「国際雑穀年」として設けるなど、SDGs を推進する作物として注目されている。本研究では、持続可能な社会づくりに貢献する乳幼児教育における実践ならびに教材の開発を行った。また、食の循環に関わる雑穀の栽培活動を通じたキャンパスの緑化「ポケット・ガーデン創生プロジェクト」を行った。

表1 こども園における「食の循環」に関わる教育活動の実施

①	雑穀の栽培に興味をもつ（園児対象）R7 年 7 月 ・お茶大学生と 3 園との共創で進めるキャンパス緑化事業「ポケット・ガーデン創生プロジェクト」の一環として、大豆の種（地産地消にこだわり東京在来大豆「すずの大豆」を育てた）を観察して作付けを行った。
②	雑穀の栽培を通して「食の循環」を体験する（園児対象）R7 年 7 月～ ・雑穀の成長過程を観察した。 ・雑穀が育つ自然環境（太陽・土・水・空気）に興味をもって関わった。
③	雑穀の栽培から「食」の未来について考える（園児・保護者・保育者・企業）R7 年 9 月 ・「雑穀米麴の味噌」ができ、こども園で「味噌祭り」を行った。保護者も調理に参加した。「雑穀米麴」を提供してくださった（株）ベストアメニティも参加して一緒に雑穀米味噌を味わいながら、「食」の未来について考えた。
総括	教材開発及び波及効果の促進 R8 年 2～3 月（保育者・保護者・企業・一般市民対象） ・地域の子育て中の家庭向けの教材として、雑穀を知るための入門絵本『げんきがでるでる ざっこくまい』を企業と共同で開発し出版した。 ・こどもフォーラムで「シンポジウム 1：作って食べる生活 ～食・命・SDGs～」を開催し、参加者全員（400 名ほど）に配布した。

本研究の成果

① 持続可能性のための幼児教育研究の推進：

本研究では乳幼児期の持続可能性のための教育として、雑穀を活用しながら持続可能性の問題に多面的に貢献できる教材を開発し広く発信した。

② 「食の循環」を体験する食育実践：

「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」（内閣府・文部科学省・厚生労働省、2017 年）では、食育の観点から「園児が自らの感覚や体験を通して、自然の恵みとしての食材や食の循環・環境への意識、調理する人への感謝の気持ちが育つ」としている。この方向性と合致する本研究は、「食の循環」をはじめとする食育実践を実現した。昨年度に子どもたちが手作りし、仕込んだ雑穀米麴による味噌が出来、保護者の人たちも一緒に調理に参加してもらい食する会を開いた。栽培する、調理する、食べる「食の循環」を子どもたちが体験した。

③ 生物多様性保全に結びつく食育実践：

「食の循環」を重視し、伝統作物の再評価及びキャンパス緑化を通して生物多様性の大切さを学ぶ本研究は、生物多様性条約の国際目標「2030 年までに生物多様性の損失を食い止め、2050 年までに完全回復を目指す」という「ネイチャー・ポジティブ」の推進にも貢献した。

④ 産学連携による SDGs 推進：

本研究が協力を得る企業は、日本で初めて「雑穀米」を商品化しており、雑穀米に関する豊富な知識を有するだけでなく、「有機栽培・無農薬野菜を届けるための農業」という目標に掲げている。共通の方向性を目指す企業との産学連携による SDGs 及び「ネイチャー・ポジティブ」の推進という、新しい乳幼児研究モデルについて、教材開発を通して提示した。

⑤ 教材開発及び波及効果の促進を通じたアウトリーチ

雑穀について乳児から誰でも楽しく学べる教材として入門絵本『げんきがでるでるざっこくまい』を企業と共同制作し、出版した。この教材を地域社会に還元することに加え、雑穀の植栽活動から派生したキャンパス緑化、400 名ほどが参加する「こどもフォーラム」でのシンポジウム等での発表を積極的に行うことで、より広範に持続可能性に向けた社会変容を引き起こす機会を提供した。本研究の目指す「産学連携による乳幼児教育実践を通じた SDGs 推進モデル」を図 1 に示した。

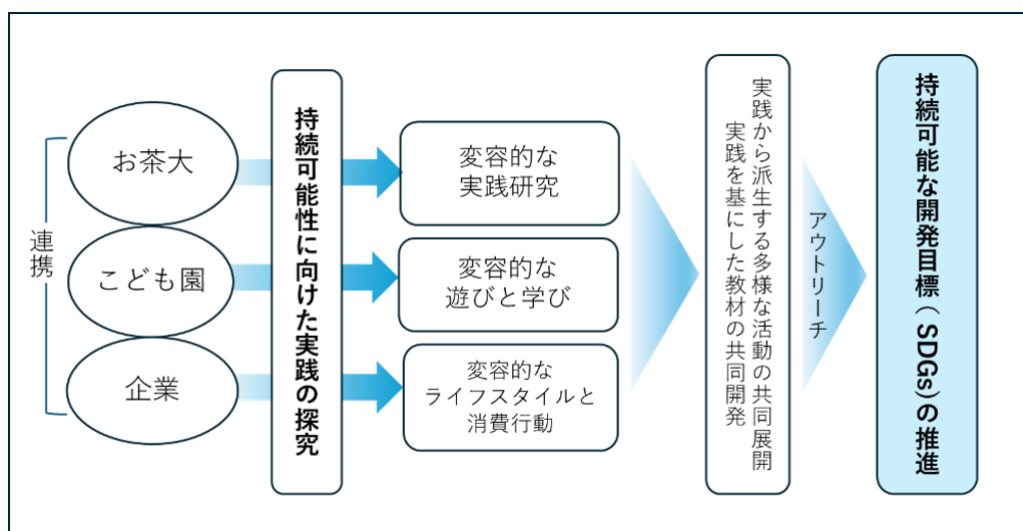


図 1 産学連携による乳幼児教育実践を通じた SDGs 推進モデル

本研究の社会的意義

乳幼児期の持続可能性のための教育に関する研究はまだ少なく、どのように子どもが持続可能な社会づくりにどのように参加していけるかという議論は萌芽期にある。本研究において、乳児から誰でも楽しく学べる教材を企業と共同で開発・制作し、園での学びを広くこどもフォーラムにおけるシンポジウムを通して還元した。また、雑穀米の教育活動から派生したキャンパス緑化の成果として「ポケット・ガーデンマップ」を制作し、本学の SDGs 活動を積極的に促進し、可視化した。

本研究は、以下のように産学連携に基づいてグローバルな視点とローカルな視点を結びつけることで SDGs を推進した。

■**産学連携による共同実践**：本研究は、企業（雑穀はベストアメニティ株式会社）から専門知識の提供を受けて進める食育実践であり、お茶大・こども園・企業の連携により展開することから目標 17「パートナーシップで目標を達成しよう」を実現した。

■**グローバルな観点**：雑穀は、高い栄養価や機能性などの利点、広い環境適応能力を有することから、持続可能な作物として、世界の食料安全保障と飢餓の解消に大きな役割を果たすことが期待されており、SDGs の目標 2「飢餓をゼロに」、目標 3「すべての人に健康と福祉を」、目標 13「気候変動に具体的な対策を」の達成に貢献した。園児・保育関係者・保護者が雑穀について知ったり調べたりする過程で、これらの地球的課題の学びにもつながられた。

■ローカルな観点：日本では古来多様な作物が栽培されてきており、食・文化・自然の多様性を支えてきた。キャンパス緑化を目指す「ポケット・ガーデン創成プロジェクト」の一環として子どもたちが雑穀の一つ「大豆」を栽培する活動は、目標 15「陸の豊かさを守ろう」に貢献した。

以上から、本研究は目標 4「質の高い教育をみんなに」のターゲット 4.7「全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする」に資する研究を行った。

研究者名：近藤 敏啓

研究課題名：次世代高容量蓄電池の実用化に向けた開発指針獲得に向けて

○成果の内容

クリーンな再生可能エネルギーを、いつでもどこでも地球上の誰もが使えるようにするという SDGs の目標 7 を達成するためには、高容量の正極と負極を組み合わせた高いエネルギー密度を有する蓄電池の開発が必要不可欠である。しかしながら、現行のリチウムイオン電池は正極、負極ともに理論容量の限界に近づいており、新たな高いエネルギー密度をもつ蓄電池の開発が求められている。本研究では、リチウムイオン電池の 10 倍以上の理論エネルギー密度を有する「リチウム空気電池」の早期実用化に向けて、課題となっている正極における反応メカニズムを解明し、課題克服のための指針を得るために、放射光 X 線技術によるオペランド追跡を試みた。なお、本成果は現在論文にまとめて発表する予定であることから、ここではデータは表示せず、文章のみで以下にまとめた。

これまでは、リチウム空気電池に限らず、「電池」という箱の中で起こっている電極反応については、電池を解体して電極反応前後での形態変化や生成物・反応物の解析が行われてきた。しかし、電池を解体する過程で形状が変化したり、副反応が起こる可能性を否定できず、真の電極反応については不明な点が多かった。電池の電極反応を解明し新規高機能蓄電池を開発するためには、電池を解体せずに電極反応が起こっている『その場』で電極反応を追跡・解析する「オペランド測定」が必須であるが、その手法は限られており、しかも特殊な装置や技術が必要であるため、ほとんど行われていないのが現状である。そこで我々は、放射光利用 X 線技術を利用して、電池を解体せずに電極反応が起こっている『その場』での電極表面形態の変化や生成物の特定を行うオペランド解析を行うことで、リチウム空気電池の実用化に向けた課題克服に取り組んでいる。

リチウム空気電池の正極反応は、放電時にリチウムイオンと還元された酸素との反応によって過酸化リチウムが析出し、充電時に過酸化リチウムが酸化溶解するという電析／溶解反応であるが（式(1)）、



反応機構に 2 つの経路が考えられていて複雑である上に、反応経路によって反応中間体が異なることがわかっている（後者は 2022 年度に我々のオペランド X 線回折（X-ray Diffraction; XRD）実験によって明らかになったものである（M. Aoki and T. Kondo, *et al.*, *J. Phys. Chem. C* **127** (2023) 15051.）。しかしながら、上記でオペランド実験に用いた X 線源は通常の X 線管を利用したもので、X 線の輝度が十分ではなく、データの S/N 比が低い上に、厚い多孔性の正極内のどこで反応が起こっているかの特定には至らなかった。一昨年度に、SDGs 推進研究所等の支援を受けて、我々は X 線管の 100 万倍輝度が高くエネルギーも 10 倍以上高いシンクロトロン放射光を利用した XRD-CT (CT: computed tomography) 測定法をリチウム空気電池の正極反応に適用し、放電過程において、リチウムイオンが供給される負極側からではなく酸素が供給されるガス拡散層側から正極反応が進むことを見出した（T. Kondo *et al.*, *Energy Technology* **14** (2026) e202501613.）。しかしながら、上記の論文では放電過程を解明したのみであり、しかもあらかじめ適当な放電量で放電させた複数の試料を放射光施設に持ち込んでの測定結果であり、電池を解体せずに測定しているもののオペランド測定に成功したものではない。そこで本研究では、測定する試料セルを見直して再設計し、測定方法も工夫したところ、リチウム空気電池の正極反応の充電過程のオペランド XRD-CT 測定に世界で初めて成功することができた。現在、再現性確認のための再実験を 5 月末に予定しており、6 月の成果報告会では、その詳細を紹介する予定である。

研究者名：鷗田 智

研究課題名：緑藻マリモの保全研究とマリモ実習での附属小児童の探究意欲向上
-連続的でスムーズな科学研究教育システムの構築-

○成果の内容

【目的】

緑藻マリモは、環境省レッドリストでは絶滅危惧Ⅰ類に指定され、そのうち阿寒湖のマリモは国の特別天然記念物に指定されている。しかし、阿寒湖の一部調査地点で、大型球状マリモの激減が確認され、大型球状マリモを復活させ保全するために、大型球状マリモの増殖と、大型球状マリモ形成プロセスの解明が急務である。また、科学探究活動やSDGs活動は大学や高校SSHなどで進められているが、「やらされている」感も強く、探究活動に意欲的な生徒を増やし、SDGsを自分ごととして捉えてもらうために小中学生の頃からの探究意欲の向上が求められている。

そこで本研究では、まず、阿寒湖の大型球状マリモに関して、A: 胞子形成を人工誘導できないか、B: どれほど「回転」が生存に重要なのか、を解析した。次に、連続的でスムーズな科学研究教育システムの構築を目指し、お茶大附属小学校高学年への「ワークシートを使用して、仮説を立てて検証する」マリモ実習で、小学生でも探究意欲が向上するのか、事前・事後アンケート等により調査した。



図1 本研究課題

【方法・結果】

1 保全研究

A: 胞子形成の人工誘導

自然界の水温および光量を模した環境で糸状体を栽培し、実験室内で胞子形成を人工誘導できないか調査した。

阿寒湖から採集した球状マリモを、まず4ヶ月間、4℃_暗所で保存し（冬）、その後、1ヶ月間、10℃_250 PPFDで栽培し（春）、その後、1ヶ月間、30℃_800 PPFD（夏）で栽培し、胞子形成を確認した。その結果、いくつかの細胞で、胞子の形成が確認できた（図2）。

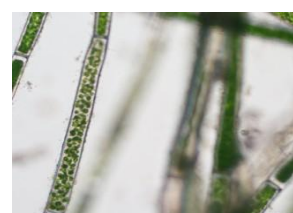


図2 胞子形成細胞

B: 光阻害

どれほど光阻害があり、どれほど「回転」が生存に重要なのかを明らかにするため、光量、水温、光照射日を変えてマリモを栽培し、Imaging-PAMでの光合成活性を測定した。

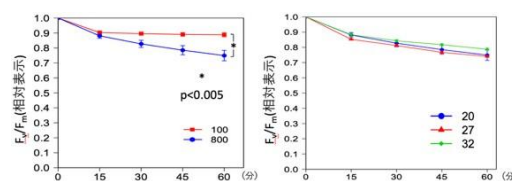


図3 光量・水温と光合成活性

その結果、光量が大きいかほど光合成活性は減少し（図3左）、水温の違いは影響ないことが示された（図3右）。光照射日は、1日照射で光合成活性は減少し、照射を辞めると1日で回復した（図4左）。1週間や25日間の照射では（図4中央、右）、回復に時間がかかった。

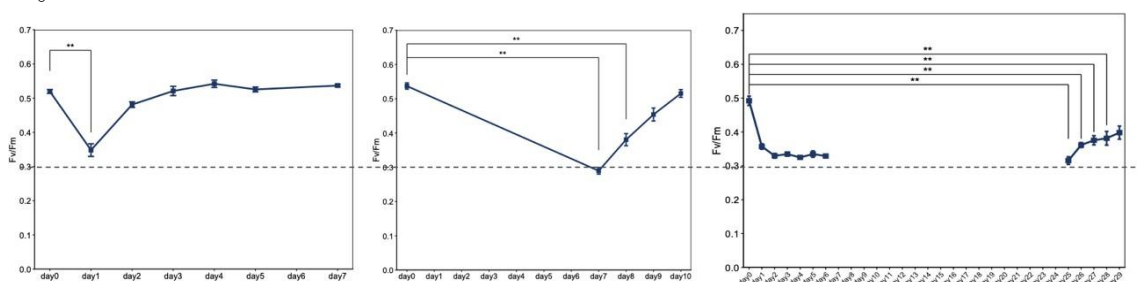


図4 光照射日と光合成活性

2 附属小学校児童へのマリモ実習の効果検証

附属小学校の児童14名、保護者14名の合計28名に、マリモに関する90分の実習を行い、心理測定尺度集を考慮した質問項目による事前・事後に質問紙調査を実施し、さらに、講座終了後、参加した保護者を対象にオンラインで質問紙調査をおこなった。その結果、例えば「将来、理科や科学に関する仕事をしたい」という質問では、実習の前後で肯定回答が54%から77%に向上した。また、「好きなことをもっと知りたい、もっと調べてみたい」が事後で100%になり、探究したいという思いにつながったと推察できる。さらに、「講座での驚き・感動を家族や友人に伝えたいと感じていた」という児童が多く、講座で芽生えた興味・関心がある場限りにならず自宅に帰ってもそこから自分の興味も広がり、家族や友人との話題にもなることが示された。一度きりの短時間イベントでも、科学への興味や探究心の向上に繋げることができると考えられる。

【今後の課題】

一昨年度は、お茶高生との紅藻カギケノリの牛メタン減少研究で、共同研究における教員とTAの仕事の役割に関する知見を習得できた。昨年度は、お茶中生とのマリモ実習で、探究活動に意欲的な生徒を増やし、SDGsを自分ごととして捉えてもらうためのテーマ設定や資料作成の重要性が理解できた。そして今年度は、お茶小生とのマリモ実習で、一度きりの短時間イベントでも、科学への興味や探究心の向上に繋げることが示唆できた。

将来的には、附属学校園が揃う本校ならではの、大学生が高校生に、高校生が中学生に、中学生が小学生に、小学生が幼稚園児に、のような近い世代が教育・研究をアシストすることで教育の質を向上するためのシステム構築を実現したい。

研究者名：清水 誠

研究課題名：植物性たんぱく質の付加価値向上を目指した大豆たんぱく質の機能性に関する研究

○成果の内容

<研究背景>

大豆はたんぱく質が豊富な食品であり、環境負荷が低く且つ生体に有益な様々な機能性を有することが知られている。申請者はこれまで、大豆たんぱく質 β -コングリシニンの摂取により抗肥満ホルモン FGF21(fibroblast growth factor21)が顕著に増加すること、転写因子 ATF4 が FGF21 を増加させる遺伝子スイッチであること、 β -コングリシニンによる抗肥満効果の多くが FGF21 を介することを報告してきた。肥満を起因とする疾患や栄養恒常性の破綻は加齢性疾患に繋がること、FGF21 は寿命延伸効果も報告されていることから、FGF21 は健康寿命を延伸する鍵分子であり、FGF21 を増加させる β -コングリシニンは健康長寿延伸効果を有する可能性を考えた。本研究では、老齢マウスを用いた動物実験を実施し、大豆たんぱく質 β -コングリシニンによる健康寿命延伸効果を検証した。

<研究成果>

本研究では、大豆たんぱく質 β -コングリシニンによる健康寿命延伸効果の検証のため、老齢マウス（22 カ月齢）を使用し、さらに肥満症に起因する加齢疾患を模倣するため高脂肪食を与える。 β -コングリシニンの有無によるエネルギー代謝や老化の変動について詳細に検討した。

雄性 C57/BL6J 老齢マウス（22 ヶ月齢）を 3 群に分け、ミルクカゼインを食餌たんぱく質源とした通常食群、ミルクカゼインをたんぱく質源とした高脂肪食（High fat diet）を与えた群（Cas 群）、 β -コングリシニンを食餌たんぱく質源とした HFD を与えた群（ β -Con 群）とし、長期間（17 週間）飼育する実験を行なった。

実験期間中、1 週間毎に、体重と筋力（握力）の測定を行なったが、高脂肪食を与えた 2 群において、有意な差は認められなかった。また、老化の主たる表現型は筋肉量・筋力の減少と認知機能の低下である。 β -コングリシニンによるこれらの変動解析のため、筋力（握力）と認知機能を測定する。このことから、解剖 3 週間前、1 週間前に認知以降テスト（新奇物体認識試験）を実施した。その結果、Cas 群と比較して β -Con 群で認知機能の改善傾向が示された。認知機能解析と同時に運動量を解析した。群間での有意な差は認められなかったものの、 β -Con 群において運動量の増加傾向が確認された。このことから、 β -コングリシニンは脳機能、運動機能を改善する可能性が示唆された。

当初は 20 週間程度の投与を予定していたが、老衰のため死亡したマウスが想定以上に多かったため、17 週目で解剖を行なった。解剖時の体重、肝臓、脂肪組織重量（白色、褐色）の有意な変動は認められなかった。エネルギー代謝に重要な肝臓において、リアルタイム PCR による遺伝子発現解析を実施した。老化マーカー（p15、p16、p21、LMNB1）、エネルギー代謝関連遺伝子（FGF21、ATF4 など）、の発現に有意な差は認められなかった。脂質合成に関連遺伝子（SREBP-1c、FASN）においては、3 群間の検定では有意差が認められなかったものの、HFD を与えた 2 群（Cas、 β -Con）において検定を行なった結果、 β -Con 群において有意に発現が低下しているという結果が得られた。糖代謝関連遺伝子、脂質分解関連遺伝子の遺伝子発現に関しては、食餌による有意な差は認められなかった。白色脂肪組織、褐色脂肪組織における遺伝子発現解析を行った結果、老化マーカーやエネルギー代謝関連遺伝子の変動は認められなかったものの、FGF21 は β -Con 群において発現の亢進傾向が認められた。また、脂質代謝や熱産生熱に関わる遺伝子 UCP1 が、 β -Con 群において有意な増加が認められた。

以上の結果より、大豆たんぱく質 β -コングリシニンの長期摂取により、脂肪組織における脂質代謝関連遺伝子の一部遺伝子の亢進が認められた。一方、各組織における老化マーカーの変動は認められなかった。本研究は、抗肥満ホルモン FGF21 やエネルギー代謝に着

目したため、肝臓や脂肪組織における解析を主に実施したが、今後は他の組織解析を詳細に解明することで、食によるアンチエイジング研究の発展に繋がることが期待される。

<SDGs 研究や SDGs のゴールとの関係>

世界的なたんぱく質危機が懸念される中、植物性たんぱく質は持続可能な栄養供給源として着目されている。とくに、動物性たんぱく質に依存しない食生活のデザインおよび推進は、地球環境への負荷軽減にも寄与し得る。さらに、高齢者人口の世界的な増加により、健康長寿社会の実現も喫緊の課題である。本研究の推進により、植物性たんぱく質の付加価値の向上、それに伴う植物性たんぱく質の生産・消費を広げることで、世界的な食糧問題の緩和に貢献するとともに、より多くの人々が安定的にたんぱく質を確保できる仕組みの構築を目指す。これは SDGs の「飢餓をゼロに（目標 2）」「すべての人に健康と福祉を（目標 3）」「気候変動に具体的な対策を（目標 13）」など、複数の目標達成に貢献する取り組みである。また、本学食物栄養学科の教員である立場を活かし、「食」の機能性研究を通じた学生への SDGs 教育への貢献が期待される。

研究者名：棚谷 綾

研究課題名：新規ビタミン D 誘導体の殺鼠剤としての実用性の検証：陸上の生態系を守るために

○成果の内容

鼠は人間社会に対して衛生的問題、都市機能の阻害、経済的被害など、甚大な影響をもたらし、その駆除には殺鼠剤が有効である。しかし、抵抗性鼠の出現や、二次毒性による標的外生物の中毒が大きな問題であり、代替製剤の開発が急務である。その候補であるビタミン D₃はビタミン D 特有の毒性による二次被害が問題となり、一部の国で非常に限定的に使用されている。私たちは既存のビタミン D 誘導体とは構造の異なり、高いビタミン D 活性を持つ新規リトコール酸誘導体 **Dcha-20** を創製し、本化合物が殺鼠活性を有することを見いだした。本研究では、**Dcha-20** の構造と機能、殺鼠剤としての実用化に向けて、以下の取り組みをおこなった。

(1) **Dcha-20** の新規誘導体の創製

Dcha-20 は高いビタミン D 活性を有する一方で、血中からの消失が速い。これまでに、**Dcha-20** の体内動態に関わると考えられる 17 位末端のカルボキシ基をアミドやジオール、カルバメートなどに変換することで、ビタミン D 活性を維持する誘導体を報告した。今回、代替官能基として、代謝的に安定であり、水素結合ドナー・アクセプターとして機能することで受容体との相互作用強化が期待される 1,2,3-トリアゾールに着目し、17 位末端への導入を検討した。昨年度確立した **Dcha-20** の効率的合成法に基づき **Dcha-20** の大スケールの合成をおこなった。ついで、17 位末端カルボキシ基を 1,2,3-トリアゾール誘導体へと変換した。合成したトリアゾール誘導体の生物活性を、ヒト急性前骨髄急性白血病細胞 HL-60 を用いた細胞分化誘導試験と、ヒト胎児腎細胞 HEK293 を用いた VDR 転写活性試験（ルシフェラーゼレポーターアッセイ）により評価した。その結果、1,2,3-トリアゾール誘導体は、**Dcha-20** には及ばないものの、高いビタミン D 活性を示した。

(2) **Dcha-20** のプロドラッグの創製

Dcha-20 のプロドラッグとして、各種エステル誘導体を合成した。これらの殺鼠活性を検討したところ、メチルエステル体が比較的強い殺鼠活性を示し、エステル部分（O-アルキル基）が嵩高くなるにつれて殺鼠活性の低下が認められた。メチルエステル体について、単回経口投与後における血漿中の **Dcha-20** 濃度を測定したところ、**Dcha-20** 自身を同用量投与した場合と比較して、メチルエステル体を投与した場合には最高血中濃度到達時間の遅延及び半減期の延長が認められた。異常の結果から、**Dcha-20** のメチルエステル体を投与した場合は、体内でエステルが徐々に加水分解され、活性本体である **Dcha-20** が持続的に供給されていることを示している。従って、プロドラッグ化が殺鼠剤開発の有効な戦略となり得ることが示唆された。

(3) **Dcha-20** の殺鼠活性機序の検討

これまでの **Dcha-20** の殺鼠活性機序の解析から、腎障害のバイオマーカーである尿素窒素、クレアチニン濃度が上昇することがわかっている。そこで、**Dcha-20** が腎臓、腸管に及

ばしている作用を解明するため、病理学解析を行った。**Dcha-20** を投与したラットでは、腎臓において糸球体および尿細管に異常が認められ、腎障害が誘発されたことが示唆された。一方 **Von Kossa** 染色によるカルシウム沈着は検出されず、致死性の主因が高カルシウム血症によるものではないことが示された。以上の知見は、ビタミン **D** を殺鼠剤として用いる場合の課題である二次毒性のリスクを低く抑えうることを示している。また、回腸において腸管上皮の損傷が観察され、下痢および脱水症状が誘発されている可能性が示唆された。今後、さらに詳細な殺鼠活性機序の解明を進める予定である。

以上、**Dcha-20** の殺鼠剤への応用を目的に、新規誘導体、プロドラッグの開発ならびに腎臓・腸管における病理解析をおこなった。本研究の中で得られた知見は、**Dcha-20** もしくはその誘導体が、既存の殺鼠剤と同程度の殺鼠活性を持ちながら、これらの課題を克服する、新たな殺鼠剤として有用な化合物であることを示唆している。今後は、**Dcha-20** 及びその誘導体の殺鼠剤としての有用性、作用機序をさらに詳細に解析することで、より実用的な誘導体の開発を目指す。

3. SDGs 関連研究成果

(1) 論文一覧

斎藤 悦子

1. Yamamoto S, Saito E and Otake M, 2025, Gender analysis of difficulties in food housework in old age, International Journal of Home Economics (IJHE), 18, 108-124

刑部 育子

1. Tsuchiya K, Gyobu I, 2025, Activating STEAM learning in young children through aha-experiences: Supporting creativity and aesthetic sensitivity in infants and toddlers, Education Sciences, 15, 2, 1-23

赤松 利恵

1. Nishida I, Akamatsu R, 2025, Expanded mindful eating and environmental awareness: Impacts on food portion choices at restaurants, Nutrition and Health, Online ahead of print
2. Kawasaki Y, Nagao-Sato S, Akamatsu R, Shimpo M, 2026, Association between food parenting practices and adulthood portion size selection to avoid overeating among Japanese: The mediating role of health and food waste concern, Nutrition and Health, 32, 3, 957-965
3. 増岡里紗, 佐藤清香, 赤松利恵, 井澤修平, 中村菜々子, 吉川徹, 池田大樹, 久保智英, 2025, 勤務間インターバルが短い日が多い者の朝食の摂取頻度の検討, 日本健康教育学会誌, 33, 2, 78-86
4. 河寄唯衣, 佐藤清香, 新保みさ, 赤松利恵, 2025, 食に対する感謝の気持ちを持つ成人の属性・食習慣の特徴と食物摂取頻度との関連, 日本健康教育学会誌, 33, 2, 61-68
5. 谷内ななみ, 佐藤清香, 西田依小里, 赤松利恵, 2025, 市販の弁当に含まれる野菜等食材の特徴, 栄養学雑誌, 83, 3, 140-150
6. 村上梨紗, 佐藤清香, 赤松利恵, 小島唯, 新保みさ, 2025, 食生活に影響を与えている食情報に基づくクラスターの主食・主菜・副菜のそろった食事の頻度とヘルスリテラシー, 栄養学雑誌, 83, 4, 151-159
7. 佐藤清香, 河寄唯衣, 赤松利恵, 谷内ななみ, 久祢田珠暉, 土井音奏, 石川栞菜, 2025, 地域在住高齢者を対象としたフレイル予防運動教室に「ちょい足し」した栄養教育プログラムの実現可能性, 日本健康教育学会誌, 33, 3, 209-216
8. 笹川珠羽, 増岡里紗, 赤松利恵, 井澤修平, 中村菜々子, 吉川徹, 池田大樹, 久保智英, 2025, 食事時間が不規則な労働者の労働要因の特徴, 日本健康教育学会誌, 33,

3, 169-176

9. Kawasaki Y, Yoshii E, Fujisaki K, Shimpō M, Nagao-Sato S, Boehnke J, Akamatsu R, Warschburger P, 2025, Cross-cultural comparison of factors influencing sustainable dietary behaviors among Japanese and German adults, *Nutrition and Health*, Online ahead of print
10. Harada K, Izawa S, Nakamura-Taira N, Yoshikawa T, Akamatsu R, Ikeda H, Kubo T, 2025, Exercising with others, motivation, and 1-year maintenance of exercise behavior among workers, *Journal of Physical Activity and Health*, 23, 1, 35-43
11. 金島春香, 赤松利恵, 2025, 健全な食生活の実践の心掛けと「食の楽しみ」を両立する者の食生活, 主観的健康感, 体格, 栄養学雑誌, 83, 5, 240-249
12. 小野春香, 赤松利恵, 2025, 子どもの頃の食事作りへの参加開始時期と成人後の主食・主菜・副菜をそろえた食事頻度との関連, 栄養学雑誌, 83, 5, 206-214
13. Kawasaki Y, Shimpō M, Nagao-Sato S, Akamatsu R, 2025, Are weight control and food waste a trade-off?: A clustering of pre-meal portion planning and plate-clearing behaviors among Japanese adult consumers, *European Journal of Nutrition*, 64, 8, 322
14. 吉井瑛美, 新保みさ, 赤松利恵, 2025, 幼児との共食頻度が高い父親の食生活および体格, 栄養学雑誌, 83, 6, 264-272
15. Akamatsu R, Otake K, 2026, Counting meal colors enhances eating pleasure related to favorable dietary behaviors: A randomized controlled trial in adult men, *Nutrition*, 142, 112988
16. Nishida I, Akamatsu R, 2026, Characteristics of individuals who take home leftovers from restaurants, *Food and Humanity*, 6, 101068
17. 谷内ななみ, 佐藤清香, 赤松利恵, 2026, 産学官連携によるスーパーマーケットでの健康な弁当販売事業の評価, 日本健康教育学会誌, 34, 1, 16-26
18. Oshiba Y, Nagao-Sato S, Akamatsu R, 2026, Eating behaviors that support a healthy diet among male university student-athletes, *Sport Sciences for Health*, 22, 121

市 育代

1. Akiyama Y, Katsuki S, Koga Y, Yamamoto M, Hironaga K, Suematsu N, Miyata K, Mukai Y, Inoue S, Nishi J, Tashiro H, Nakano Y, Funakoshi K, Tagawa K, Ichi I, Tsutsui H, Abe K, Matoba T, 2025, Effect of PCSK9 inhibitor usage on coronary endothelial dysfunction in patients with hypercholesterolemia after coronary stenting: The CuVIC-2 Trial, *Journal of Cardiology*, 86, 3, 230-237
2. Shinozaki K, Honda T, Yamaji K, Nishijima E, Ichi I, Yamane D, 2025, Impaired

ApoB secretion triggers enhanced secretion of ApoE to maintain triglyceride homeostasis in hepatoma cells, *Journal of Lipid Research*, 66, 5, 100795

3. Takase H, Chikazawa M, Noguchi M, Ichi I, Takahashi Y, Yamauchi Y, Shimizu M, Sato R, Sasaki T, 2026, LXR activation in skeletal muscle cells enhances differentiation and promotes protein synthesis, *American Journal of Physiology-Endocrinology and Metabolism*, 330, 4, E442-E460

植村 知博

1. Fujimoto M, Shimizu Y, Ito Y, Ebine K, Minamino N, Kanazawa T, Fukao Y, Nakano A, Uemura T, Ueda T, 2025, Neofunctionalization of VAMP7 opened up a plant-unique vacuolar transport pathway, *Current Biology*, 35, 11, 2630-2641.e10
2. Feng A, Ebine K, Ito Y, Kanazawa T, Sawasaki T, Nozawa A, Uemura T, Nakano A, Ueda T, 2025, Retrieval from vacuolar/endosomal compartments underpinning neofunctionalization of SNARE in plants, *Nature Plants*, 11, 2168-2180
3. Ogita K, Fukasawa N, Wang R, Fujisaki T, Katagiri K, Uemura T, Tanaka H, 2025, VPS45 and SYP4 Qa-SNARE proteins jointly regulate auxin distribution and plant development in *Arabidopsis*, *Development*, 152, 22, dev205145

須藤 紀子

1. Sato H, Sudo N, Hwang T, Liu J, Yang SC, 2026, Disaster relief strategies of the Buddhist Tzu Chi Charity Foundation: A case study of the 2024 Hualien Earthquake in Taiwan, *Progress in Disaster Science*, 29, 100517
2. Sato H, Sudo N, Wada Y, 2025, What Japan can learn from Canada's guidelines on food and nutritional support during emergencies: A scoping review, *Urban Resilience and Sustainability*, 3, 2, 119-153
3. 高橋春花, 須藤紀子, 2025, COVID-19 第7波の宿泊療養者への食事提供, *栄養学雑誌*, 83, 5, 215-222
4. Sato H, Sudo N, Inada M, Tsuboyama-Kasaoka N, 2025, Effects of disaster phase and shelter size on meal provision in Kumamoto Earthquake evacuation shelters, *Disaster Medicine Public Health Preparedness*, 19, e116, 1-10

長澤 夏子

1. 藤山真美子, 長澤夏子, 2025, 公共トイレの「共用」に対するユーザの意識と利用に関する研究—性別を問わずに利用できるトイレ整備における空間や設備の共用に関する考察—, *日本建築学会計画系論文集*, 90, 830, 670-678
2. 石川敦雄, 西川向日葵, 長澤夏子, 荒井直子, 柏原誠一, 脇有紀, 2025, 共働き子育て

てワーカーの住まいにおけるリカバリープロセスの探索—グループインタビューに基づく修正版グランデッド・セオリー・アプローチによる質的分析—, 日本建築学会計画系論文集, 90, 834, 1671-1682

3. Kono M, Nara R and Nagasawa N, 2025, Comparative longitudinal study on indoor environment factors and their impact on residents' health in Japanese nursing homes, Sustainable Built Environment Conference 2025 (SBE25) in Tokyo, IOP Conference Series: Earth and Environmental Science, 1582

新田 陽子

1. Yamashita I, Yaguchi T, Kobayashi Y, Ito H, Komori H, Noda K, Sato Y, Nishinari K, Nitta Y, 2025, Rheology and NMR studies of true gel formation and gelation mechanism for lentinan, Food Hydrocolloids, 167, 111415
2. Geonzon LC, Hayano Y, Takagi H, Takatsuno K, Nitta Y, Mayumi K, Matsukawa S, 2025, Gelation mechanism and network structure of mixed cold-water fish gelatin and pork skin gelatin elaborated at the molecular level, Food Hydrocolloids, 168, 111535
3. Kawachi H, Yamamoto S, Nitta Y, 2025, Purification of diamine oxidase from pea seedlings for application in foods, Journal of Biological Macromolecules, 25, 15-25

浜野 隆

1. 浜野隆, 2025, 学びの本質, 教職研修, 2025 年 7 月号, 112

矢島 知子

1. Koike T, Taguchi H, Hirota K, Kiyatake S, Tatara N, Kayaki Y, Yamaguchi A and Yajima T, 2026, Facile generation and reaction of densely trifluoromethylated alkyl radicals by dual photoredox and acid catalysis, Chemical Communications.
2. Sato C, Yamaguchi A, Shibata H, Katsuno Y, Kanbara T, Yajima T, 2025, Phloxine B catalyzed visible-light-induced perfluoroalkylation of phenols, Journal of Organic Chemistry, 90, 24, 8434-8438
3. Yamaguchi A, Nakamura T, Shibata H, Kanbara T, Yajima T, 2025, Photoinduced reaction of diiodoperfluoroalkanes with aromatic compounds: Divergent synthesis of two product types, European Journal of Organic Chemistry, e202500295
4. Tagami K, Yajima T, 2025, Perfluoroalkylation reactions via halogen-bonded electron donor-acceptor (EDA) complexes of amines and perfluoroalkyl halides under visible light, Tetrahedron, 193, 135156
5. Yamaguchi A, Yajima T, 2025, Recent advances in metal-free photoinduced

hydroxyperfluoroalkylation of styrenes, Chemistry Letters, 55, 1, upaf230

由良 敬

1. Ito Y, Sanno R, Ashikari S, Yura K, Asahi T, Ylla G, Kataoka K, 2025, Chromosome-scale whole genome assembly and annotation of the Jamaican field cricket *Gryllus assimilis*, Scientific Data, 12, 826
2. Szewc L, Zhang X, Bajczyk M, Bielewicz D, Zimna M, Yura K, Kato M, Nomoto M, Garcia-León M, Rubio V, Tada Y, Furumoto T, Aoyama T, Szweykowska-Kulinska Z, Staiger D, Jarmolowski A, Tsuge T, 2025, The plant cleavage factor I complex is essential for precise cleavage and polyadenylation site determination, Plant Physiology, 199, kiaf483S
3. Hirata K, Suzuki T, Yura K, Asahi T, Kataoka K, 2026, Gut microbiome differences across mixed-sex and female-only social rearing regimes in female field crickets *Teleogryllus occipitalis* (Orthoptera: Gryllidae), Insects, 17, 91
4. Sato F, Fujii A, Katagiri S, Uchiumi Y, Gotoh M, Miyamoto Y, Ishikawa M, Kawashima Y, Nakajima D, Konno R, Yura K, Nakagawa K, Ishizuka T, Hashimoto K, 2026, Induction of neurodegeneration in the hippocampus of senescence-accelerated mouse-prone 8 (SAMP8) mice by blood-brain barrier-crossing serum amyloid P component, Journal of Neuroinflammation, 23, 1, 66
5. Kataoka K, Sanno R, Gaczorek T, Bhattarai UR, Ito Y, Inoue S, Yura K, Asahi T, Ylla G, Mito T, Extavour CG, 2026, Chromosome-scale genome assembly and annotation of the two-spotted cricket *Gryllus bimaculatus* (Orthoptera: Gryllidae), Genes | Genomes | Genetics, jkag036

五十嵐 悠紀

1. 元村愛美, 五十嵐悠紀, 2025, 人間用衣服単一画像を用いた小型人形用衣服デザインシステムの提案, 芸術科学会論文誌, 24, 4, 13:1-13:10
2. 坂本夏海, 五十嵐悠紀, 2025, 写真を入力とする 2 次元アバター用衣装制作支援, 画像電子学会論文誌, 54, 4, 395-404

河合 英徳

1. 新井舞子, 田村哲郎, 河合英徳, 2025, 猛暑日の都市域における気象擾乱を考慮した乱流場・温熱場の推定に関する研究, 日本建築学会環境系論文集, 90, 835, 440-450

藤山 真美子

1. 藤山真美子, 長澤夏子, 2025, 公共トイレの「共用」に対するユーザの意識と利用に

関する研究—性別を問わずに利用できるトイレ整備における空間や設備の共用に関する考察—, 日本建築学会計画系論文集, 90, 830, 670-678

佐藤 瑤子

1. 佐藤瑤子, 石山瑞希, 並河香代子, 鈴木さやか, 島本和恵, 2026, 保育所離乳食との比較に基づく市販ベビーフード活用方法の提案, 日本家政学会誌, 77, 1-9
2. Sato Y, Okimura A, 2025, Predicting vitamin C and potassium retention in boiled potatoes according to water temperature increase rate, *International Journal of Gastronomy and Food Science*, 41, 101259
3. Mitsui S, Sato Y, 2025, Analysis of mass transfer process in Chinese cabbage during cooking with consideration of hindrance by cuticle, *Journal of Food Science*, 90, e70491
4. Sato Y, Suzuki K, 2025, Prediction of the salt intake from ramen noodles when the soup is not consumed, *Food Science and Technology Research*, 31, 407-417
5. Sato Y, Inagaki R, Shimamoto K, Tsuji H, 2025, Validating nutritional values of daycare lunches using recipe calculation based on standard tables of food composition in Japan, *Journal of Food Composition and Analysis*, 143, 107614
6. Yamashita I, Yaguchi T, Kobayashi Y, Ito H, Noda K, Sato Y, Nishinari K, Nitta Y, 2025, Rheology and NMR studies of true gel formation and gelation mechanism for lentinan, *Food Hydrocolloids*, 167, 111415

雨宮 敏子

1. Araki J, Isogai Y, Iizuka A, Amemiya T, Hamada H, 2025, Salicylic-acid-grafted chitin nanowhiskers as reinforcing fillers and fabric surface finishes with UV-protecting and deodorizing performances, *Cellulose*, 32, 4057-4075
2. Araki J, Aoyama K, Kurasawa T, Watanabe H, Iizuka A, Amemiya T, Hamada H, Akiyama Y, 2025, Deodorizing performance of cellulose nanowhisiker-reactive dye adducts as pigment inks for dyeing and inkjet printing, *ACS Applied Nano Materials*, 8, 28, 14121-14131
3. 都甲由紀子, 朝比奈はるか, 佐藤真理子, 雨宮敏子, 柴田優子, 森下寛, 菊池多絵, 2025, Fashion STEAM プラットフォーム構想と糸を学ぶ STEAM 教育の教材開発, 工学教育, 73, 4, 31-36

野田 響子

1. Noda K, Igarashi M, Morimitsu Y, Tsutsuura S and Murata M, 2025, 2,5-Dimethylpyrazine and 2,3,5-trimethylpyrazine in natto are formed metabolically

from threonine through aminoacetone by *Bacillus natto* during the fermentation, *Food Science and Technology Research*, 31, 5, 427-439

2. Yamashita I, Komori H, Yaguchi T, Kobayashi Y, Ito H, Noda K, Sato Y, Nishinari K, Nitta Y, 2025, Rheology and NMR studies of true gel formation and gelation mechanism for lentinan, *Food Hydrocolloids*, 167, 111415

河寄 唯衣

1. 河寄唯衣, 佐藤清香, 新保みさ, 赤松利恵, 2025, 食に対する感謝の気持ちと属性・食習慣・食物摂取状況との関連, *日本健康教育学会誌*, 33, 2, 61-68
2. 佐藤清香, 河寄唯衣, 赤松利恵, 谷内ななみ, 久祢田珠暉, 土井音奏, 石川葉菜, 2025, 地域在住高齢者を対象としたフレイル予防運動教室に「ちょい足し」した栄養教育プログラムの実現可能性, *日本健康教育学会誌*, 33, 3, 209-216
3. Kawasaki Y, Nagao-Sato S, Shimpo M, Akamatsu R, 2026, Association between food parenting practices and adulthood portion size selection to avoid overeating among Japanese: The mediating role of health and food waste concern, *Nutrition and Health*, 32, 3, 957-965
4. Kawasaki Y, Nagao-Sato S, Shimpo M, Fujisaki K, Yoshii E, Boehnke J, Akamatsu R, Warschburger P, 2025, Cross-cultural comparison of factors influencing sustainable dietary behaviors among Japanese and German adults, *Nutrition and Health*, Online ahead of print
5. Kawasaki Y, Nagao-Sato S, Shimpo M, Akamatsu R, 2025, Are weight control and food waste a trade-off?: A clustering of pre-meal portion planning and plate-clearing behaviors among Japanese adult consumers, *European Journal of Nutrition*, 64, 322

(2) 著書一覧

斎藤 悦子

1. 斎藤悦子, 2026, 「雇用管理区分の変化と企業理念の浸透」, 『ジェンダー公正な人事制度とはなにか』, 大槻奈美編, 勁草書房, pp.213-231
2. 斎藤悦子, 2026, 「生活経営学とジェンダード・イノベーション」, 『ジェンダード・イノベーション入門』, 石井クンツ昌子・林香里・大隅典子監修, 東京大学出版会, pp.57-69

刑部 育子

1. お茶大ポケット・ガーデン創生プロジェクト委員会, 2026, 『Ochanomizu University pocket garden project Map & Information』, 刑部育子・仙田考・宮里暁美・岩崎貴也・難波知子・内海緒香・松島のり子・辻谷真知子・お茶の水女子大学「環境デザイン論」

授業受講者・文京区立お茶の水女子大学こども園・お茶の水女子大学附属幼稚園・お茶の水女子大学附属いずみナーサリー（編集・デザイン 土方悠輝）

2. 刑部育子，宮里暁美，内海緒香，山崎寛恵，杉山沙旺美／編集・デザイン 土方悠輝，2026，『リズムと暮らし—9つのものがたり』，お茶の水女子大学，p.47
3. 刑部育子，宮里暁美，内海緒香，光橋翠ほか，2026，『雑穀—うれしい＊おいしいプロジェクト—文京区立お茶の水女子大学こども園の実践』，編集・デザイン 土方悠輝，お茶の水女子大学・ベストアメニティ株式会社，p.19
4. 刑部育子，宮里暁美，内海緒香，光橋翠，川島雅子，土方悠輝，2026，『げんきがでるでる ざっこくまい』，編集・デザイン 土方悠輝，お茶の水女子大学・ベストアメニティ株式会社，p.44

赤松 利恵

1. 赤松利恵，2024，「2章 行動科学の理論とモデル，3章 組織づくり・地域づくりへの展開，4章 栄養教育マネジメント，5章 栄養教育論，6・2章 栄養と環境に配慮した栄養教育の展開，7章 栄養教育プログラム」，『Visual 栄養学テキスト 栄養教育論 第3版』，永井成美・赤松利恵編，中山書店，pp.13-132
2. 岡田俊，小平雅基，細金奈奈，野村健介，赤松利恵，鈴木秀洋，和久田学，木原望美，山口貴史，小平かやの，柳橋達彦，2025，「V. 栄養・食生活（単）」，『日本子ども資料年鑑 2026』，愛育研究所編，中央出版，pp.165-190

須藤 紀子

1. 須藤紀子，2026，「公衆栄養関連法規と制定の経緯・意義，わが国の管理栄養士・栄養士制度と職業倫理，災害時の栄養対策」，『公衆栄養学 2026 年版』，酒井徹・由田克士編，医歯薬出版，pp.40-53，172-174
2. 須藤紀子，2026，「2-6. 諸外国の健康・栄養問題の現状と課題，3-7. 諸外国の健康・栄養政策」，『ウェルネス公衆栄養学 2026 年版』，加島浩子・森脇弘子・寄谷博子編，医歯薬出版，pp.44-50，93-103
3. 須藤紀子，2025，「サバイバルクッキング！生き抜くための料理」，『Survive!! 高等学校家庭基礎【改訂版】』，河村美穂編，教育図書，pp.104-105
4. 須藤紀子，2026，「成人期，更年期の生理的特徴と栄養管理」，『応用栄養学第2版』，南久則・木戸康博編，医歯薬出版，pp.71-82

矢島 知子

1. 矢島知子，2025，「重付加によるフルオロアルキル—アルキル交互型ポリマーの合成」，『有機フッ素化合物の合成と応用最前線』，今野勉監修，CMC 出版，pp.56-61
2. 田上湖都，矢島知子，2025，「ペイズ最適化による可視光ヒドロキシペルフルオロアル

キル化条件の最適化」,『ベイズ最適化の適用とパラメータ制御,活用事例』,技術情報協会

五十嵐 悠紀

1. 五十嵐悠紀(編著),中村聡史,渡邊恵太,椎尾一郎,福地健太郎,苗村健,2025,「1章インタラクシオンデザインって? 7章 未来を考える」,『インタラクシオンデザインー生活・技術・人をつなぐデザインのかたちー』,コロナ社, p.216

新實 五穂

1. クリスティーヌ・バール,2026,「序章・3章・4章の翻訳」,『ズボンの政治史』,吉川佳英子,村田京子,新實五穂,西尾治子,丹羽晶子,渡辺采香訳,法政大学出版局, pp.3-17, 77-138

藤山 真美子

1. 藤山真美子,2026,「公衆トイレから考える都市空間」,『ジェンダード・イノベーション入門』,石井クンツ昌子ほか監修,高丸理香ほか責任編集,東京大学出版会
2. 藤山真美子,2026,「Shared Space・間のデザイン」,『創立150周年記念シンポジウム「イノベーションはどのように創られるか〜お茶の水女子大学の歴史から考える〜」』,佐々木泰子・塚本由晴,国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダード・イノベーション研究所, pp.52-59

佐藤 瑤子

1. 佐藤瑤子,2026,「第三章 食品と調理加工 3.3 動物性食品」,『よくわかる食物学ー食への誘いー』,藤原葉子編著・中澤弥子ほか著,朝倉書店, pp.71-79

(3) 学会等活動

所属研究者が筆頭又は共同発表者として行った学会発表は、以下のとおりであった。

- ・国際学会：招待講演 1 件、口頭発表 7 件、ポスター発表 11 件 計 19 件
- ・国内学会：招待講演 6 件、口頭発表 62 件、ポスター発表 29 件 計 97 件

(4) 獲得した外部資金

所属研究者が研究代表者または分担者として獲得した外部資金は、以下のとおりであった。

- ・科研費を獲得しての研究プロジェクト：17 件
- ・その他の外部資金を獲得しての研究プロジェクト：18 件
- ・学内競争的資金を獲得しての研究プロジェクト：1 件

(5) 企業との共同研究

2025 年度は、16 件の共同研究が民間企業と連携して実施された。

(6) 特許

2025 年度は、7 件の特許が申請された。

Ⅲ. 教育部門

1. サントリーグループとの共同講座開催

(1) サントリーグループ・SDGs 推進研究所共同講座「企業から学ぶサステナビリティー水とペットボトル・サントリーを事例としてー」の開催

2025 年 7 月 2 日（水）及び 9 日（水）にサントリーホールディングス株式会社（以下、サントリー社）との共同講座「企業から学ぶサステナビリティー水とペットボトル・サントリーを事例としてー」を開催した。本講座では、サントリー社サステナビリティ経営推進本部シニアアドバイザー北村暢康氏をお招きし、「企業から学ぶサステナビリティ」をテーマに講義とワークショップを行った。

イベント概要

第 1 回 [講義] サステナビリティ経営とペットボトルリサイクル	
日時	2025 年 7 月 2 日（水） 15:00～16:30
場所	共通講義棟 1 号館 302 室
対象	本学学生
定員	20 名（要事前申し込み/先着順）
内容	サントリー社サステナビリティ経営推進本部の方から、サステナビリティ経営についてお話を伺う。

第 2 回 [ワークショップ] リサイクル行動ワークショップ	
日時	2025 年 7 月 9 日（水） 15:00～17:00
場所	共通講義棟 1 号館 302 室
対象	本学学生
定員	20 名（要事前申し込み/先着順）
内容	グループごとに学内のペットボトル回収状況を見てまわり、課題を見つけたのち解決策を共有する。



1 週目の講義の様子



2 週目のワークショップの様子

本講座は2週連続の開講となり、1週目はペットボトルリサイクルを中心に企業におけるサステナビリティ経営について、サントリー社北村氏にお話をいただいた。サステナビリティ経営の具体的な事例として、サントリーのペットボトルのリサイクル推進に向けた取り組みが紹介された。リサイクルの循環の起点は私たち消費者である、という点が印象に残った学生が多いようであった。

2週目はワークショップ形式で開催された。グループに分かれ学内をまわって現状を把握したあと、グループごとにリサイクル行動について発表を行った。いずれのグループも1週目の講義をふまえ、現状から課題を発見し、その解決策を提示するという大変意義のある発表となった。質疑応答も受講した学生同士の意見交換も活発に行われた。

(2) 講演会「限りある資源との向き合い方—サントリーのサステナビリティ経営から読み解く—」の開催

2025年7月4日(金)には、本研究所の後援により荒木美奈子准教授(SDGs推進研究所副所長・文教育学部グローバル文化学環)の「国際協力学」の授業において、サントリー社北村氏を講師に招きゲスト講師講演会「限りある資源との向き合い方—サントリーのサステナビリティ経営から読み解く—」を開催した。

北村氏から「水と生きる」企業・サントリーのサステナビリティ経営の紹介と解説があり、資源との向き合い方について学んだ。学生たちからはリサイクルやサーキュラーエコノミーについて多くの質問があった。



(3) サントリーグループ・SDGs推進研究所合同企画「BtoB（ボトル to ボトル）リサイクルチャレンジ！！＝日常の、ちょっとした工夫で、CO₂を減らそう！！＝」の開催

2025年10月から2026年2月にかけて、サントリーグループとの合同企画「BtoB水平リサイクルチャレンジ！！＝日常の、ちょっとした工夫で、CO₂を減らそう！！＝」を開催した。

本企画は、2025年12月17日に締結した「持続可能な社会の実現に向けた産学連携協定」を背景とする取り組みの一つである。本協定では、使用済みペットボトルの「ボトル to ボトル」水平リサイクルの推進とともに、サステナビリティ課題の解決に貢献できる人材の育成を両輪として進めていくことが掲げられており、本企画はその具体的な実践の場として展開されることになった。

本企画は、日常的に使用されているペットボトルのリサイクルを題材に「資源循環」の実現に向けて学内でどのような行動変容や工夫が可能かを考え、実際に行動することを目的としている。



2025 年 7 月の開催時から引き続き、ナビゲーターとして北村氏を招き、同社 日下部健氏、株式会社ジャパンビバレッジエコロジーにご協力いただき、2025 年度は計 3 回のプログラムを開催した。



イベント概要

日時	第 1 回 2025 年 10 月 29 日（水）13:20～14:50 第 2 回 2025 年 12 月 3 日（水）13:20～14:50 第 3 回 2026 年 2 月 9 日（月）10 : 00～16 : 00
場所	第 1 回・第 2 回 本館 113 室 第 3 回 リサイクル・プラザ JB（埼玉県さいたま市）及びさいたま市内
対象	本学学生
定員	20 名（要事前申し込み/先着順）
内容	第 1 回 ペットボトルリサイクルの全体像を学び、今後の活動に向けた視座を共有 第 2 回 プロジェクトの設計と実行計画の具体化 第 3 回 現場体感と作戦会議

本学とサントリーとの連携協定に基づき、今後はキャンパスから排出されるペットボトルの循環や、サステナビリティ課題に主体的に取り組む人材の育成など、より長期的な視点での取り組みが期待されており、その第一歩として位置づけられる活動となった。



リサイクル・プラザ JB 様敷地内にて



質疑応答の様子

2. 保育マネジメント研究会との連携教育

国立大学法人お茶の水女子大学保育マネジメント研究会が主催する「第10回お茶大こどもフォーラム」に、本研究所が後援として携わった。2つのシンポジウムに加え、多彩なテーマによる計6つの分科会が行われ、附属学校園との連携教育の機会となった。



イベント概要

日時	イベント名	肩書
2026 年 3 月 1 日（日）	第 10 回お茶大こどもフォーラム	後援

(2) 150 周年記念シンポジウム開催

2026 年 2 月 17 日（火）、SDGs 推進研究所主催で「お茶の水女子大学 創立 150 周年記念 公開シンポジウム 災害レジリエントな社会の実現に向けて ～避難生活の質の向上を目指す～」を開催した。

冒頭、斎藤所長から開会の挨拶及び趣旨説明があった。その後、司会の小中客員教授の進行のもと、立場の異なる 5 名の登壇者から、避難所環境の現状と課題、災害時の食・衛生・ジェンダーといった観点から、最新の調査研究や現場で得られた知見が発表された。

参加者は学内外から幅広く、附属高校を含む学生のほか、自治体職員、企業関係者、一般などから構成され、講演後の質疑応答では活発な意見交換が行われた。相川機構長の閉会の辞で、参加へのお礼を述べ、盛況のうちに閉会となった。



実施概要

日時	2026 年 2 月 17 日（火）15:30～17:30
場所	共通講義棟 2 号館 201 室（対面）
主催	SDGs 推進研究所
共催	東京ガス株式会社
協力	日本工営株式会社、埼玉大学
参加者数	107 名

【司会】小中鉄雄（SDGs 推進研究所客員教授／埼玉大学研究機構教授）

【開会挨拶・趣旨説明】斎藤悦子（お茶の水女子大学 SDGs 推進研究所 所長）



講演①「自治体の避難所の生活の質の向上を目指して～産官学連携による実態調査と見える化～」

千野祥瑚（東京ガス株式会社 地域共創カンパニー カーボンニュートラルシティ推進部 主任）

講演②「備蓄食品の選び方」

須藤紀子（お茶の水女子大学 基幹研究院 自然科学系 教授）



講演③「大規模災害後の安心できる衛生的な生活に向けて～東日本大震災、能登半島地震などの現場から～」

池本久利（日本工営株式会社 基盤技術事業本部 環境部）

講演④「2024 年台湾花蓮地震における避難所環境の特徴」

佐藤寛華（お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科ライフサイエンス専攻 食品栄養科学領域 博士後期課程 3 年）

講演⑤「ジェンダー多様性を踏まえた災害対応へ」

瀬山紀子（埼玉大学 ダイバーシティ推進センター／社会変革研究センターレジリエント社会研究部門）



【質疑応答】



【閉会挨拶】

相川京子（お茶の水女子大学副学長／サステイナブル社会実装機構長）



【学生によるポスター掲示ならびに発表】

シンポジウム開始前に研究所の学生委員会（OCHA-SDGs 学生委員会）によるポスター発表を同会場で開催した。8つのプロジェクトについて活動の成果を紹介し、参加者と交流する機会となった。

- ・食品ロス削減に向けた北区との協働
- ・他大学連携部
- ・規格外野菜
- ・フードドライブ
- ・手話べり
- ・おゆずりフェス
- ・マイボトルを持とう
- ・徽音祭



※登壇者の肩書、学年はシンポジウム実施当時のものである。

2. 産学連携

(1) mottECO 普及イベントにてブース出展

2025 年 7 月 1 日（月）に、ホテルメトロポリタンエドモント 2 階（東京都千代田区）にて、産官学アライアンス「mottECO 普及コンソーシアム」主催の mottECO FESTA2025 が開催された。『mottECO (モッテコ)』とは中央省庁（環境省、農林水産省、厚生労働省、消費者庁）が推奨する取組で、食べきりや適量注文だけでなく、外食先での食べ残しを持ち帰ることで、官民一体で食ロス削減を目指している。

本イベントは食品ロス削減を中心とした SDGs、資源循環等、環境に関わる啓発を目的とし、関係省庁・大学・事業者等による食品ロス削減の取り組みを紹介するブース出展や、パネルディスカッション・講演会・もったいないメニュー等の試食等が行われた。



イベント概要

日時	2025 年 7 月 1 日（月）10:30～14:00
場所	ホテルメトロポリタン エドモント 2 階（東京都千代田区飯田橋 3-10-8）
目的	食品ロス削減を中心とした SDGs、資源循環等、環境に関わる啓発
内容	・食品ロス削減の取組を紹介するブース出展 （mottECO 普及コンソーシアムに加盟する民間企業、都内自治体、関係省庁、大学等による出展） ・各ステークホルダーによるパネルディスカッション ・食品ロス削減についての講演会 ・もったいないメニュー等の試食

本研究所では、本学における食品ロス削減に関する取り組み（※①②）をポスターにまとめ、出展した。また、研究所や OCHA-SDGs 学生委員の取り組みに関する資料（研究リリースレット、OCHA-SDGs 学生委員会活動報告書、食品ロス削減に関する研究論文※③等）を配布し、本研究所の取り組みを広報した。

※① フードドライブ：2022 年より株式会社セブン&アイ・ホールディングスと協同実施しているフードドライブの活動内容をまとめた。

※② 規格外野菜：2024 年度に、学生委員会規格外野菜プロジェクトのメンバーが農業従事者を対象とし、規格外野菜の活用の現状と問題点に関するインタビュー調査を行い、その内容をまとめた。

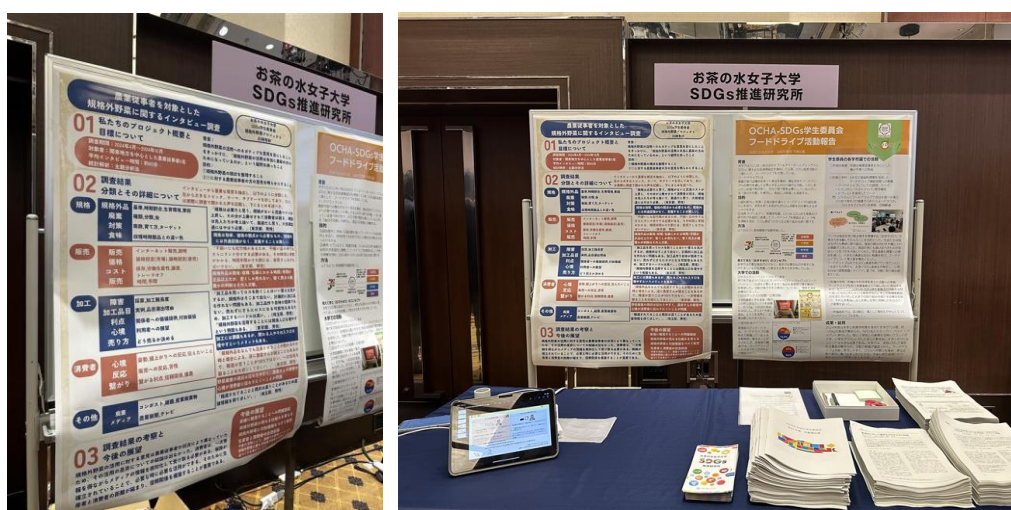
※③ 研究所の研究員や学生が関わった 3 つの論文を配布した。

1) 西田依小里他, 飲食店において適量注文をする者の特徴, 栄養学雑誌, 81, 2, 68-74, 2023

2) 久祢田珠暉他, 大学生協食堂における食品ロス削減の取組「OchaEco 弁当」の結果評価・プロセス評価, 日本健康教育学会誌, 33, 1, 34-44, 2025

3) Kawasaki Y, et al. The relationship between traditional and common Japanese childhood education and adulthood towards avoiding food waste behaviors. Waste Manag. 2022;145:1-9. doi:10.1016/j.wasman.2022.04.020

※OchaEco 弁当についての詳細はこちら (2023 年度事業報告書 p.78)。



本研究所ブースの展示

※本学は株式会社セブン&アイ・ホールディングスと SDGs に関する包括連携協定を締結している。

(2) 食品ロス削減全国大会にてブース出展

2025 年 10 月 30 日（木）に、大手町プレイスホール&カンファレンス（東京都千代田区）にて、千代田区、全国おいしい食べきり運動ネットワーク協議会主催の「第 9 回食品ロス削減全国大会 in 千代田」が開催された。「食品ロス削減全国大会」は、食品ロス削減に対する国民の意識の醸成、社会的な機運を高めることを目的に、10 月 30 日の「食品ロス削減の日」に合わせて開催される全国規模のイベントで、今年は千代田区で開催された。



イベント概要

日時	2025 年 10 月 30 日（木）10:00～17:00
場所	大手町プレイスホール&カンファレンス（東京都千代田区大手町 2-3-1）
目的	食品ロス削減に対する国民の意識の醸成、社会的な機運を高める
内容	・オープニングセレモニー（大江戸助六太鼓） ・食品ロス削減推進表彰・食品産業もったいない大賞 表彰式 ・トークセッション ・食品ロス削減絵画・標語展表彰式 ・トークライブ ・パネル・ブース展示 ・子ども向けコーナー ・もったいないメニューの紹介

本研究所では、mottECO FESTA 2025 をきっかけに、本学における食品ロス削減に関する取り組み(※①②)をポスターにまとめ、出展した。また、研究所や OCHA-SDGs 学生委員の取り組みに関する資料（研究所リーフレット、OCHA-SDGs 学生委員会活動報告書、食品ロス削減に関する研究論文※③等）を配布し、本研究所の取り組みを広報した。

※① フードドライブ：2022 年より株式会社セブン&アイ・ホールディングスと協同実施しているフードドライブの活動内容をまとめた。

※② 規格外野菜：2024 年度に、学生委員会規格外野菜プロジェクトのメンバーが農業従事者を対象とし、規格外野菜の活用の現状と問題点に関するインタビュー調査を行い、その内容をまとめた。

※③ 研究所の研究員や学生関わった 3 つの論文を配布した。

1) 西田 依小里他, 飲食店において適量注文をする者の特徴, 栄養学雑誌, 81, 2, 68-74, 2023

2) 久祢田珠暉他, 大学生協食堂における食品ロス削減の取組「OchaEco 弁当」の結果評価・プロセス評価, 日本健康教育学会誌, 33, 1, 34-44, 2025

3) Kawasaki Y, et al. The relationship between traditional and common Japanese childhood education and adulthood towards avoiding food waste behaviors. Waste Manag. 2022;145:1-9. doi:10.1016/j.wasman.2022.04.020

※OchaEco 弁当についての詳細はこちら (2023 年度事業報告書 p.78)。



本研究所ブースの展示

当日は、企業・自治体・教育機関・市民団体など、多様な立場の来場者が訪れ、会場は終日盛況だった。本研究所のブースにも多数の方々がお立ち寄りくださり、事務局員と来場者との間で活発な意見交換が行われた。

(3) サントリーホールディングス株式会社と産学連携を通じた持続可能な社会に向けた連携協定を締結

本学とサントリーホールディングス株式会社（本社：大阪府大阪市北区、代表取締役社長：鳥井信宏、以下「サントリー」）は、産学連携を通じた持続可能な社会の実現に寄与することを目的に、2025年12月17日に連携協定を締結した。

本学とサントリーは、2025年度から学生が企業の具体的なサステナビリティ活動を学び、資源循環型社会への理解を深める取組を実施してきた。本学とサントリーは、ペットボトルの「ボトル to ボトル」水平リサイクルのほか、サステナビリティ課題の解決に貢献する人材の育成に向けた活動に取り組む。

<今後予定している取組>

1) 本学キャンパスから排出されるペットボトルのリサイクル

本学のキャンパス内から排出されたペットボトルを回収し、サントリーの飲料用ペットボトル容器として再生・使用することで、「ボトル to ボトル」水平リサイクルを実現させる。

2) サステナビリティ課題の解決に貢献できる人材の育成

SDGs 推進研究所内の学生組織である OCHA -SDGs 学生委員会では、飲み終えたペットボトルの資源循環等について関心を寄せ、検討を行ってきた。このような学生の意識・行動を、サントリーとの協働を通じて、SDGs 推進研究所が考える「生活者起点の理念」から「実践へ」に昇華させることを目指す。そして、この取組を通じてサステナビリティ課題の解決に貢献できる人材の育成を行う。

(4) サントリーグループとの共同講座開催

1) サントリーグループ・SDGs 推進研究所共同講座「企業から学ぶサステナビリティー水とペットボトル・サントリーを事例としてー」の開催

pp.32-33 参照

2) 講演会「限りある資源との向き合い方ーサントリーのサステナビリティ経営から読み解くー」の開催

p.33 参照

3) サントリーグループ・SDGs 推進研究所合同企画「B to B（ボトル to ボトル）リサイクルチャレンジ！！＝日常の、ちょっとした工夫で、CO₂を減らそう！＝」の開催

pp.33-34 参照

3. 地域連携

(1) 文京区クールアースフェア 2025 に出展

2025 年 8 月 2 日（土）、文京シビックセンターにて文京区が開催する「クールアースフェア 2025」に OCHA-SDGs 学生委員会が参加した。マイボトルを持とうプロジェクトの活動に関する展示や、ペットボトルキャップをアイロンで溶かすコースター作りを実施した。

また、昨年度に引き続き、東京大学、東洋大学の学生と連携して、オリジナルカードを景品にしたクイズラリーを実施した。カードには、ウォーターサーバーに関する情報を記載し、家に帰った後も楽しく環境について考えることができるように工夫した。

イベント概要

日時	2025 年 8 月 2 日（土）10:00～15:00
場所	文京シビックセンター 地下 2 階・1 階
目的	地球温暖化対策に関する啓発を通じて意識向上を図り、ゼロカーボンシティの実現を目指す
内容	大学・企業・関連団体・行政団体によるパネル展示、クイズ、工作、ゲーム
参加大学	・跡見学園女子大学 マネジメント学部生活環境マネジメント学科 ・お茶の水女子大学 OCHA-SDGs 学生委員会 ・東京大学 GX 学生ネットワーク ・東洋大学 SDGs アンバサダー ・文京学院大学 人間学部環境ゼミ

クールアースフェア 2025
～目指せ!ゼロカーボンシティ～

開催日程 **8月2日(土) 10:00～15:00**
開催場所 **文京シビックセンター 地下2階・1階**
入場 **無料**

クイズ **展示** **エ 作** **ゲ ーム**

アンケートに回答いただいた方に
オリジナル木製うちわをプレゼント!!

イベントの
詳細はこちら

ブースのご紹介

大 学

- 跡見学園女子大学 マネジメント学部生活環境マネジメント学科
- お茶の水女子大学 OCHA-SDGs学生委員会
- 東京大学GX学生ネットワーク
- 東洋大学SDGsアンバサダー
- 文京学院大学 人間学部環境ゼミ

関係団体

- エコ啓蒙促進会
- 一般社団法人環境教育振興協会
- 認定NPO法人街ing本郷
- NPO法人森づくりフォーラム
- リサイクルイン文京

企 業

- 東京ガス株式会社 東京東支店
- 東京電力パワーグリッド株式会社 大塚支社
- 東京メトロ(東京地下鉄株式会社)
- トヨタモビリティ東京株式会社
- パナソニック株式会社 エレクトリックワークス社
- 文化シヤッター株式会社
- 株式会社良品計画

行政団体

- オール東京62市区町村共同事業「みどり東京・温暖化防止プロジェクト」
- 東京都政務企画局
- 東京都下水道局北部下水道事務所
- 熊本県
- 熊本県五木村
- 経済産業消費生活センター
- リサイクル清掃隊
- 環境政策課

お問い合わせ 文京区資源環境部環境政策課 03 (5803) 1276



「マイボトルを持とうプロジェクト」
の展示



各大学のオリジナルカード



コースター作りの様子



ペットボトルキャップを
アイロンで溶かしている
様子



完成したコースター

(2) 文京区内大学サステナビリティ関連取組のための交流・意見交換会参加

2025 年 10 月 31 日に文京区民センター（東京都文京区）にて、開催された「第 4 回 文京区内大学サステナビリティ関連取組紹介のための交流・意見交換会」に参加した。

この交流・意見交換会は、区内の大学・団体と関連企業が参加し、各大学・団体が日頃のサステナビリティに関する取り組みについて発表、参加者で意見交換をする会で、今回は跡見学園女子大学、中央大学、東京大学、東洋大学、日本女子大学、東京大学消費生活協同組合及びお茶の水女子大学が発表を行った。

イベント概要

日時	2025 年 10 月 31 日（火） 14:00～17:45
場所	文京区民センター3A 会議室
目的	区内の大学や団体・企業が一同に会し、サステナビリティに関する意識を相互に高め、取組の共有・拡大を図る
内容	・サステナビリティに関する取組について発表（各大学と生協） ・意見交換（参加大学と区内企業等）

各大学・団体の発表テーマ

大学・団体名	発表者	テーマ＜抜粋＞
跡見学園女子大学	学生	AI アプリ「エコポン」を育てる、新しい紙の分別と環境教育
お茶の水女子大学	学生	OCHA-SDGs 学生委員会の紹介とフードドライブの活動について
中央大学	大学	中央大学の SDGs の取組み
東京大学	大学	東京大学の GX 推進の取組
東京大学 GX 学生ネットワーク	学生	GX 駒場スタイル ～キャンパスライフ・ニュースタンドールの協創～
東洋大学	学生	東洋大学 SDGs アンバサダーの活動紹介
日本女子大学	学生	外国人観光客を中心としたホテルビュッフェロス削減
東京大学 消費生活協同組合	大学	マイコプロテインを使用したメニューの提供について

出典：文京区公式サイト <https://www.city.bunkyo.lg.jp/b003/p008161.html>

本研究所からは OCHA-SDGs 学生委員会委員長が発表を行い、本研究所と連携して活動を行う学生組織 OCHA-SDGs 学生委員会の紹介と、附属学校園と連携したフードドライブの活動を報告した。

OCHA-SDGs 学生委員会では、手話を学ぶ会である「手話べり」、自分には要らなくなったもののまだ使える物を譲る「おゆずりフェス」、「ウォーターサーバーの設置」、「附属学校園、他大学、自治体、企業との連携」といった活動をプロジェクトベースでメンバーを構成し日々取り組んでいることや「ロジックモデル（＝課題とその現状に対し、手段から目的までのロジックを端的に図式化したもの）」なども活用し未来を見据えた持続可能な活動をしていることを報告した。

また、本学ならではのフードドライブの特色として、幼稚園・小学校・中学校・高校・大学が同一敷地内にあるという利点を生かして全学で活動を行っていることに触れ、OCHA-SDGs 学生委員会が食品ロスの削減と社会福祉の向上に寄与していることを発表した。



(3) 食品ロス削減に向けた北区との協働プロジェクト

2025 年度に東京都北区と協働し、「北区版 食品ロス削減協力事業者制度（仮称）」の仕組みづくりなど、食品ロス削減へのさらなる意識向上と消費者の食べ残し削減等の取り組みを進めるための事業案を検討した。

食品ロス削減協力事業者制度とは、食品ロスの削減に取り組んでいる飲食店等を、行政が登録し、行政の広報媒体を通して宣伝することで、消費者と事業者が食品ロス削減に取り組むことを後押しする制度である。一部の 23 区では、既に導入済みであり、北区独自の制度案作成のため、OCHA-SDGs 学生委員会と協働する運びとなった。

学生委員は週に 1 度の打ち合わせで議論を深め、北区職員との月に一回程度のワークショップ、インタビュー調査やアンケート調査を通して制度案を練り上げた。2025 年 12 月には最終報告会を開催し、完成した制度案を発表した。提案書を北区生活環境部長（2025 年 12 月当時）に手渡し、今後の制度化に向けた意見交換を行った。

最終報告会 開催概要

開催日時	2025 年 12 月 10 日（水）13:00～14:30
開催場所	共通講義棟 2 号館 102 室
実施内容	・ 提案内容の発表 ・ 質疑応答及び講評 ・ 提案書手交及び記念撮影

学生委員の作成した制度案

対象事業者	北区内の外食店、惣菜店などの飲食事業者
登録要件	登録要件：食品ロス削減のための以下の取り組みのうち、1or2 項目以上実践している対象事業者を登録する。 ①分量に配慮したメニュー等の導入 ②持ち帰り対応や容器持参の受け入れ ③食べ残しを減らすための呼びかけ ④販売方法の工夫 ⑤フードバンクやフードシェアアプリの利用 ⑥食品ロスのリサイクルに取り組んでいること ⑦上記以外の食品ロス削減のための工夫 ⑧AI を利用した食品ロス削減に取り組んでいること ⑨店舗ごとの客層に合わせた食品ロス削減の啓発を実施していること ⑩従業員に対して食品ロス削減の啓発を行っていること

登録事業者への インセンティブ	・ステップアップ認証の設定 ・取り組み共有の場の提供 ・消費者に働きかける資材の提供
登録や制度活用 の障壁への対応	・手続きの煩雑さ →電子申請と郵送の両方式に ・食べ残し持ち帰り時の衛生管理への懸念と費用負担 →持ち帰り後の衛生管理の責任は消費者にあることを啓発、容器費用の一部 または全額の補助、環境省が定める mottECO などへの参加を促進
広報活動	・行政の発信媒体を基盤とした広報（例：北区ニュース、区アプリとの段階 的な連携） ・事例紹介（例：成功事業者のインタビュー公開） ・イベント（例：スタンプラリー）

既に他の自治体等で実施されている類似の取り組み（項目）との重複もあるが、上記のうち⑧,⑨,⑩は、他自治体での導入実績が少ない項目である。特に⑨,⑩は、学生委員による制度案作成の過程で、消費者や従業員といった「人」に対する啓発が重要であるという意見が多く挙がったため盛り込まれた。

このような経緯で提案された制度案は、北区内での協議を経て、「もったいないゼロ応援店」として 2026 年 7 月より開始されることが決定した。登録店舗の認定要件として学生委員が提案した内容の多くが受け入れられ、北区内における飲食店、食事を提供する宿泊施設又は食料品小売店を営む事業者を対象に、登録が呼びかけられる予定である。



提案内容の発表をする学生



提案書手交

(4) 「あらぶんちょメタバースフェスタ」 出展

3 回目の開催となる「あらぶんちょメタバースフェスタ 2026」（東京ケーブルネットワーク株式会社主催）に OCHA-SDGs 学生委員会がポスター展示の形で参加した。

「あらぶんちょ」とは、「荒川区・文京区・千代田区」の「荒」「文」「千代」の文字にちなんだネーミングの地域情報番組で、「あらぶんちょメタバースフェスタ」ではこれら 3 区の教育機関に所属する学生が SDGs 活動をメタバース空間で紹介した。OCHA-SDGs 学生委員会は、一昨年に続き、今回 2 回目の参加となった。

プラットフォーム Vket Cloud（専用アプリ不要、スマートフォンで入室可能）を舞台に行われた同イベントでは、来訪者はゲーム世界のプレーヤーになった気分メタバース空間を散策できる。学生委員会は 8 つのプロジェクトについて、2025 年度の活動や目標をまとめてポスター展示の形で発表した。



イベント概要

日時	2026 年 3 月 16 日（月）～3 月 31 日（火）
場所	Vket Cloud （専用アプリ不要、スマートフォンで入室可能な無料のメタバース空間）
目的	荒川区・文京区・千代田区の教育機関に所属する学生が SDGs 活動を紹介する
参加校・団体	・ 跡見学園女子大学 ・ お茶の水女子大学 ・ 京華女子中学・高等学校 ・ 専修大学 ・ 東京家政学院中学・高等学校 ・ 東京家政学院大学 ・ 東洋学園大学 ・ Bunkyo Brut ・ b-lab
当委員会の 発表内容	・ 食品ロス削減に向けた北区との協働プロジェクト ・ 他大学連携部

	・規格外野菜プロジェクト ・フードドライブ活動報告 ・手話べりプロジェクト ・おゆずりフェスプロジェクト ・マイボトルを持とうプロジェクト ・微音祭プロジェクト
--	---



OCHA-SDGs 学生委員会では 8 枚のポスターを展示した

4. 国際連携

(1) 台北医学大学との国際カンファレンス開催

p.36 参照

5. 附属学校園との連携

(1) フードドライブ

2022 年度から引き続き、本学の SDGs 推進活動の一環として、附属学校園（幼稚園・小学校・中学校・高等学校）と協働でフードドライブを実施した。学生委員と各学校園が個別に連携し、より SDGs 活動を自分ごと化し、フードドライブの認知度をあげることを目的に実施することにした。

実施概要

対象	本学・附属学校園
日時	大学は 2025 年 12 月 1 日（月）～12 日（金） ※実施主体（大学・各附属学校園）により異なる
場所	大学・附属学校園が個別に設定
方法	・回収場所に Box を設置し、児童、生徒、学生、保護者、教職員に食品の寄付を募った ・実施前後に広報活動を行った

本研究所は全体の取りまとめを担当し、大学における広報活動や附属学校園と実施サポートに従事した。実施における実働は OCHA-SDGs 学生委員会が担った。本活動により、昨年度から約 10%増加した約 138kg の食品が収集され、認定 NPO 法人セカンドハーベスト・ジャパンに寄付された。

附属小学校では、食と通じて SDGs や他者への思いやりについて考える交流授業を実施した。（pp.78-79 参照）

附属高等学校では、高校アフガン・ボランティア部有志生徒を中心に、附属中学校保健委員会と連携してフードドライブを実施した。前年度まで附属中学校でフードドライブの運営を牽引していた生徒が高校に進学し、上級生と共に意欲的に活動を継続した。中学校と共通で作成した啓発ポスター及び動画を活用して校内啓発を行い、生徒の理解促進と参加意識の向上を図るとともに、中高連携によるフードドライブ活動を推進した。

2026 年 1 月に開催された振り返りの会では、フードドライブが児童・生徒や教員、保護者の間で定着しつつあり、貴重な学校間連携の場になっているとのコメントが得られた。



「大学フードドライブ」のリーフレット

参画機関と相互連携



参画機関と相互連携のイメージ図

2026 年 1 月に開催された振り返りの会では、昨年度から引き続き「おすそ分け」をキーワードに活動が展開されたことや、OCHA-SDGs 学生委員会が附属学校園と連携して附属学校園の教育に参画したこと、来年度に向けての反省点が共有された。

(2) こども雑穀祭りの開催

本研究所が研究助成を行った研究が共同プロジェクトに発展し、2025 年 9 月 14 日に「こども雑穀祭り」が本学こども園にて開催された。

実施概要

名称	こども雑穀祭り
対象	こども園の在園児・卒園児・保護者
日時	2025 年 9 月 14 日（日）
場所	こども園
内容	自家製味噌を手づくりおにぎりや野菜スティックとともに味わう

2024 年度に SDGs 推進研究所が研究助成を行った刑部育子先生（基幹研究院 人間科学系 教授）の「『食』の体験を通した持続可能性のため幼児教育実践研究：『食』の未来を考える素材としての『雑穀米』に着目して」の研究が、こども園と雑穀米販売のベストアメニティ株式会社様（福岡県）との共同プロジェクトに発展した。

ベストアメニティ株式会社様の協力を得て、こども園の園児たちは 2025 年 2 月に味噌作りに挑戦した。その味噌が熟成したため、在園児だけでなく卒園児も招き、自家製味噌を味わう会として「こども雑穀祭り」を同年 9 月に開催する運びとなった。

イベントの様子は東京新聞「自家製みそ『おいしかったよ』 文京で『こども雑穀祭り』園児や保護者ら 150 人参加（2025 年 9 月 17 日付）」においても紹介された。

(3) お茶大ポケット・ガーデン創生プロジェクト

文京区立お茶の水女子大学こども園では、大学創設 150 周年記念事業の連携企画として、緑化プロジェクトを始動した。学内で自然を感じられるように、キャンパス内であまり活用されてこなかったわずかな隙間等を活用し、小さな憩いの場「ポケット・ガーデン」を創り出す試みである。

実施概要

名称	お茶大ポケット・ガーデン創生プロジェクト
参加者	お茶大 3 園（こども園、幼稚園、ナーサリー）の在園児・保護者・教職員、「環境デザイン論」を受講した大学生ら
日時	2025 年度（2025 年 4 月～2026 年 3 月）※2026 年度も継続予定
場所	大学キャンパス各所（計 13 カ所）
内容	学内の小さな隙間を活用して小さなガーデンを創生し、緑化に寄与する

本プロジェクトでは「環境デザイン論（2025 年度開講）」（担当：仙田考先生／田園調布学園大学准教授／本学非常勤講師）を受講する学生が植栽を担当し、その後園児が散歩の途中で水やりをするといった、附属学校園間の連携を活かした取り組みも行われている。活動を通じて園児たちが自然の様子・変化に気づき、その成長にも関わっていくことで、日常生活の中で SDGs が浸透することを目指している。関連する SDGs としては、次の 3 つが挙げられる。

- ④ 質の高い教育をみんなに
- ⑪ 住み続けられるまちづくりを
- ⑮ 陸の豊かさを守ろう



本年度、キャンパス内には次の 13 カ所のポケット・ガーデンが誕生した。

1. Trois Couleur (トロワ・クルール)
2. X'mas garden (クリスマスガーデン)
3. 坂で彩る四季の庭
4. 香りの庭
5. 五感を育むガーデン
6. 物語の庭
7. 子どもも猫も楽しめるガーデン
8. 小さな冒険者たちの秘密基地
9. くいしんぼうの庭
10. ワクワクの木
11. うれしい庭
12. 対話がうまれる庭
13. みんなの庭



今後は、幼児教育、保育学の専門家に加え、造園、建築領域の研究者、植物学者、生態学者、アーティストなど、幅広い異分野の専門家の知見を組み込みながら、プロジェクトを進めていく予定である。

6. アウトリーチ活動

関連する SDGs の目標別に記載した。※重複する項目は、() に記載

目標 1 に関連するアウトリーチ活動

目標	氏名	年・月	活動名	主催者	主な対象者
1 (3)	赤松利恵	2026 年 3 月	令和 7 年度みやぎの食環境づくりプロジェクト推進研修会 及び情報交換会講師	宮城県保健 福祉部	専門職

目標 2 に関連するアウトリーチ活動 (1)

目標	氏名	年・月	活動名	主催者	主な対象者
2(3,4, 13, 15)	刑部育子	2026 年 3 月	日本ならではの「食」の体験を通した持続可能性のための幼児教育研究ー「雑穀」から広がる食育実践とキャンパス緑化ー	お茶の水女子大学 保育マネジメント研究会	一般、専門職
2(3,4, 13, 15)	刑部育子	2026 年 3 月	第 10 回お茶大こどもフォーラム シンポジウム 1 作って食べる生活ー食・命・SDGsー対談	お茶の水女子大学 保育マネジメント研究会	一般、専門職
2(3)	須藤紀子	2025 年 11 月	第 2 回中央研修会	千葉県栄養士会	専門職
2(3)	須藤紀子	2025 年 12 月	令和 7 年度東京都栄養担当者会議	東京都	専門職
2(3)	須藤紀子	2025 年 12 月	日経 SDGs Week EXPO 2025	日本経済新聞社	一般
2(3)	須藤紀子	2025 年 12 月	もとまちフェス 2025	文京区、学校法人順天堂、元町ウェルネスパーク	一般
2(3)	須藤紀子	2026 年 2 月	お茶の水女子大学 創立 150 周年記念 公開シンポジウム	お茶の水女子大学 SDGs 推進研究所	一般
2(3)	須藤紀子	2026 年 2 月	メディケアフーズ展 (第 18 回)	インフォーマ マーケッツ ジャパン 株式会社	一般

目標 2 に関連するアウトリーチ活動（2）

目標	氏名	年・月	活動名	主催者	主な対象者
2(3)	須藤紀子	2026 年 3 月	令和 8 年度総会「記念講演会」	(一社) 日本 医療福祉セ ン ト ラ ル キ ャ チ ン 協 会	専門職
2(3)	須藤紀子	2026 年 3 月	令和 7 年度「おいしい給食・食 育ネットワーク講演会」	足 立 区 衛 生 部 こ こ ろ と か ら だ の 健 康 づ く り 課	専門職
2(3, 12, 13)	河寄唯衣	2025 年 4 月	令和 7 年度東京都特別区保健 所栄養士会講演会講師	東 京 都 特 別 区 保 健 所 栄 養 士 会	専門職

目標 3 に関連するアウトリーチ活動（1）

目標	氏名	年・月	活動名	主催者	主な対象者
3 (2,4, 13, 15)	刑部育子	2026 年 3 月	日本ならではの「食」の体験を 通した持続可能性のための幼 児教育研究－「雑穀」から広がる 食育実践とキャンパス緑化－	お茶の水女 子大学 保 育マネジメ ント研究会	一般、専門職
3 (2,4, 13, 15)	刑部育子	2026 年 3 月	第 10 回お茶大こどもフォー ラム シンポジウム 1 作って 食べる生活～食・命・SDGs～ 対談	お茶の水女 子大学 保 育マネジメ ント研究会	一般、専門職
3(4, 13, 15)	刑部育子	2026 年 3 月	第 10 回お茶大こどもフォー ラム 分科会 ポケット・ガー デンの取り組みを辿る 講師	お茶の水女 子大学 保 育マネジメ ント研究会	一般、専門職
3	赤松利恵	2025 年 6 月	令和 7 年度高津区栄養士等給 食関係者研修会	川 崎 市 保 健 所高津支所	一般、専門職
3	赤松利恵	2025 年 7 月	令和 7 年度学校保健会総会講 演会	調 布 市 教 育 委 員 会 学 務 課	専門職

目標3に関連するアウトリーチ活動（2）

目標	氏名	年・月	活動名	主催者	主な対象者
3	赤松利恵	2025 年 7 月	令和 7 年度栄養教諭・学校栄養職員研修会	秋田市教育委員会	専門職
3	赤松利恵	2025 年 7 月	令和 7 年度杉並区栄養士専門研修	杉並区教育委員会	専門職
3	赤松利恵	2025 年 8 月	令和 7 年度川崎区栄養士等研修会	川崎市保健所 川崎支所	専門職
3	赤松利恵	2025 年 8 月	令和 7 年度東京都学校栄養職員経験者前期（6 年次）研修	東京都教育庁	専門職
3	赤松利恵	2025 年 10 月	令和 7 年度佐渡市学校給食研究会講演会	佐渡市学校給食会	専門職
3	赤松利恵	2025 年 10 月	令和 7 年度専門性向上研修	東京都教職員研修センター	専門職
3	赤松利恵	2025 年 11 月	令和 7 年度栄養教諭研修	広島市教育委員会学校教育部	専門職
3	赤松利恵	2026 年 1 月	日本総合健診医学会総合健診医向け動画講師	一般社団法人 日本総合健診医学会	専門職
3	赤松利恵	2026 年 1 月	令和 7 年度食に関する指導研修会	東京都教育庁 地域教育支援部	専門職
3(1)	赤松利恵	2026 年 3 月	令和 7 年度みやぎの食環境づくりプロジェクト推進研修会 及び情報交換会講師	宮城県保健福祉部	専門職
3(2)	須藤紀子	2025 年 11 月	第 2 回中央研修会	千葉県栄養士会	専門職
3(2)	須藤紀子	2025 年 12 月	令和 7 年度東京都栄養担当 者会議	東京都	専門職
3(2)	須藤紀子	2025 年 12 月	日経 SDGs Week EXPO 2025	日本経済新聞社	一般
3(2)	須藤紀子	2025 年 12 月	もとまちフェス 2025	文京区、学校法人順天堂、 元町ウェルネスパーク	一般

目標 3 に関連するアウトリーチ活動（3）

目標	氏名	年・月	活動名	主催者	主な対象者
3(2)	須藤紀子	2026 年 2 月	お茶の水女子大学 創立 150 周年記念 公開シンポ ジウム	お茶の水女子 大学 SDGs 推 進研究所	一般
3(2)	須藤紀子	2026 年 2 月	メディケアフーズ展（第 18 回）	インフォーマ マーケッツ ジャパン株式 会社	一般
3(2)	須藤紀子	2026 年 3 月	令和 8 年度総会「記念講演 会」	（一社）日本医 療福祉セント ラルキッチン 協会	専門職
3(2)	須藤紀子	2026 年 3 月	令和 7 年度「おいしい給食・ 食育ネットワーク講演会」	足立区衛生部 こころとから だの健康づく り課	専門職
3	佐藤瑤子	2026 年 2 月	給食施設栄養管理研修会 講師	横浜市中区	専門職
3(2, 12, 13)	河寄唯衣	2025 年 4 月	令和 7 年度東京都特別区保 健所栄養士会講演会講師	東京都特別区 保健所栄養士 会	専門職

目標 4 に関連するアウトリーチ活動（1）

目標	氏名	年・月	活動名	主催者	主な対象者
4(17)	斎藤悦子	2025 年 5 月～ 2026 年 3 月	共助資本主義の実現に向けた 大学連合 各種イベント参加	大学連合	一般
4(5)	斎藤悦子	2025 年 10 月	大学見学会 セントヨゼフ女 子学園高校	お茶の水女 子大学広報・ ダイバーシ ティ推進課	一般、生徒

目標4に関連するアウトリーチ活動（2）

目標	氏名	年・月	活動名	主催者	主な対象者
4 (7, 12, 13)	斎藤悦子	2026年 2月	サントリー&SDGs 推進研究 所合同企画 「BtoB リサイク ルチャレンジ！！」	サントリー ホールディ ングス株式 会社、お茶の 水女子大学 SDGs 推進 研究所	学生
4(5)	斎藤悦子	2026年 3月	附属高校キャリアガイダンス (ジェンダー研究)	お茶の水女 子大学附属 高校	生徒
4 (2,3, 13, 15)	刑部育子	2026年 3月	日本ならではの「食」の体験 を通した持続可能性のための 幼児教育研究－「雑穀」から 広がる食育実践とキャンパス 緑化－	お茶の水女 子大学 保 育マネジメ ント研究会	一般、専門職
4 (2,3, 13, 15)	刑部育子	2026年 3月	第10回お茶大こどもフォー ラム シンポジウム 1 作って 食べる生活～食・命・SDGs～ 対談	お茶の水女 子大学 保 育マネジメ ント研究会	一般、専門職
4 (3, 13, 15)	刑部育子	2026年 3月	第10回お茶大こどもフォー ラム 分科会 ポケット・ガー デンの取り組みを辿る 講師	お茶の水女 子大学 保 育マネジメ ント研究会	一般、専門職
4	市育代	2025年 5月	第3回 食べ物に関心のある 人たち集まれセミナー	女子中高生 の理系進路 選択支援プ ログラム理 工系フロン トランナー 育成加速イ ニシアティ ブ	女子中高生
4	浜野隆	2025年 8月	非認知能力を育てる－家庭で できることは何か	ダヴィンチ マスターズ	一般

目標4に関連するアウトリーチ活動（3）

目標	氏名	年・月	活動名	主催者	主な対象者
4	浜野隆	2025 年 8 月	非認知能力を育てる一家庭で できることは何か	ダヴィンチ マスターズ	一般
4	浜野隆	2025 年 10 月	非認知能力の大切さとその育 て方について	世田谷区教 育委員会	一般
4	浜野隆	2025 年 12 月	幼児教育における国内外の現 状・課題と今後の展望につい て	キャンパス クリエイト	一般、起業家
4	浜野隆	2026 年 1 月	非認知能力の育成	東京都私学 財団	学校管理職

目標5に関連するアウトリーチ活動（1）

目標	氏名	年・月	活動名	主催者	主な対象者
5	斎藤悦子	2025 年 4 月 ～ 2026 年 3 月	福井県男女共同参画審議会	福井県	一般
5	斎藤悦子	2025 年 4 月 ～ 2026 年 3 月	独立行政法人国立女性教育会 館 外部評価委員会	国立女性教 育会館	専門職
5	斎藤悦子	2025 年 5 月 ～ 2026 年 3 月	港区男女平等参画推進会議	港区	一般
5	斎藤悦子	2025 年 6 月 ～ 2026 年 3 月	宇都宮市女性活躍推進会議	宇都宮市	一般
5	斎藤悦子	2025 年 8 月	ジェンダード・イノベーション 研究所 大阪・関西万博「知 れば知るほど納得！ジェン ダード・イノベーション」	お茶の水女 子大学ジェ ンダード・イ ノベーション 研究所	一般
5	斎藤悦子	2025 年 8 月	女性活躍推進本部会議講演 「ジェンダード・イノベーシ ョン×宇都宮市」宇都宮市の女 性活躍推進の加速化に向けて	宇都宮市	一般、管理職

目標5に関連するアウトリーチ活動（2）

目標	氏名	年・月	活動名	主催者	主な対象者
5(8)	斎藤悦子	2025 年 9 月	R7 ハッピーキャリア縁カ レッジ ワーク・ライフ・バラ ンス講義	福井県	一般
5(4)	斎藤悦子	2025 年 10 月	大学見学会 セントヨゼフ女 子学園高校	お茶の水女 子大学 広 報・ダイバー シティ推進 課	一般、生徒
5(8)	斎藤悦子	2025 年 10 月	戦略的イノベーション創造プ ログラム (SIP) D&I 社会実現 のための学び方・働き方に関す る実証研究 中間報告シンポジウム	お茶の水女 子大学ジェ ンダード・イ ノベーション 研究所	一般、専門職
5	斎藤悦子	2025 年 11 月	埼玉県 ジェンダー主流化と ジェンダード・イノベーション	埼玉県	一般
5	斎藤悦子	2026 年 1 月	大田区女性リーダー育成講座 イノベーションが生み出す私 たちの快適な暮らし	大田区	一般
5	斎藤悦子	2026 年 2 月	男女共同参画推進講演会 ア ンペイドワークを可視化する ～1975 年アイスランドから 宇都宮の女性たちへ～	宇都宮市	一般
5(4)	斎藤悦子	2026 年 3 月	附属高校キャリアガイダンス (ジェンダー研究)	お茶の水女 子大学附属 高校	生徒
5	斎藤悦子	2026 年 3 月	富士通株式会社・お茶の水女子 大学 リサーチラボ社会連携 講座 企業ワークショップ	お茶の水女 子大学ジェ ンダード・イ ノベーション 研究所	企業

目標5に関連するアウトリーチ活動（3）

目標	氏名	年・月	活動名	主催者	主な対象者
5(6)	長澤夏子	2026 年 2 月	水まわりから考える未来の豊かな暮らしへ：共創によるジェンダード・イノベーション	お茶の水女子大学ジェンダード・イノベーション研究所、共創工学部	一般
5	新實五穂	2025 年 8 月～9 月	新宿区立男女共同参画講座「ファッションとジェンダーの歴史—西洋服飾における性差とは—」	新宿区立男女共同参画推進センター（ウィズ新宿）	一般

目標6に関連するアウトリーチ活動

目標	氏名	年・月	活動名	主催者	主な対象者
6(5)	長澤夏子	2026 年 2 月	水まわりから考える未来の豊かな暮らしへ：共創によるジェンダード・イノベーション	お茶の水女子大学ジェンダード・イノベーション研究所、共創工学部	一般

目標7に関連するアウトリーチ活動

目標	氏名	年・月	活動名	主催者	主な対象者
7(4, 12, 13)	斎藤悦子	2026 年 2 月	サントリー&SDGs 推進研究所合同企画 「BtoB リサイクルチャレンジ！！」	サントリーホールディングス株式会社、お茶の水女子大学SDGs 推進研究所	学生
7(9, 12, 13)	矢島知子	2025 年 6 月	JACI/GSC シンポジウム座長	公益社団法人新化学技術推進協会	研究者

目標 8 に関連するアウトリーチ活動

目標	氏名	年・月	活動名	主催者	主な対象者
8(5)	斎藤悦子	2025 年 9 月	R7 ハッピーキャリア縁カ レッジ ワーク・ライフ・バラ ンス講義	福井県	一般
8(5)	斎藤悦子	2025 年 10 月	戦略的イノベーション創造プ ログラム (SIP) D&I 社会実現 のための学び方・働き方に 関する実証研究 中間報告シン ポジウム	お茶の水女 子大学ジェ ンダード・イ ノベーション 研究所	一般、専門職
8(10, 12)	斎藤悦子	2025 年 12 月	CSR 構想インターゼミナ ル大会 共通テーマ「ウェル ビーイングと CSR」	経営倫理学 会	一般、学生

目標 9 に関連するアウトリーチ活動

目標	氏名	年・月	活動名	主催者	主な対象者
9(7, 12, 13)	矢島知子	2025 年 6 月	JACI/GSC シンポジウム座長	公益社団法 人新化学技 術推進協会	研究者

目標 10 に関連するアウトリーチ活動

目標	氏名	年・月	活動名	主催者	主な対象者
10(8, 12)	斎藤悦子	2025 年 12 月	CSR 構想インターゼミナ ル大会 共通テーマ「ウェル ビーイングと CSR」	経営倫理学 会	一般、学生

目標 11 に関連するアウトリーチ活動 (1)

目標	氏名	年・月	活動名	主催者	主な対象者
11	長澤夏子	2025 年 10 月	究極のパブリック!!!!!! ～ トイレを通して考える、公共 施設の在り方～	超図書館総 合研究所	一般
11	藤山真美子	2025 年 5 月	お茶の水女子大学 創立 150 周年記念シンポジウム 「イノ ベーションはどのように創ら れるか～お茶の水女子大学の 歴史から考える～」	お茶の水女 子大学	一般

目標 1 1 に関連するアウトリーチ活動（2）

目標	氏名	年・月	活動名	主催者	主な対象者
11	藤山真美子	2025 年 6 月	創立 150 周年記念講演会「都市・建築デザインとジェンダード・イノベーション」	お茶の水女子大学	学生
11	藤山真美子	2025 年 8 月	JST/CRDS 科学技術未来戦略ワークショップ「ジェンダード・イノベーション」第 1 回	科学技術振興機構(JST) 研究開発戦略センター (CRDS)	専門職
11	藤山真美子	2025 年 8 月	大阪・関西万博 ウーマンズパビリオン「WA」スペースイベント「知れば知るほど納得！ジェンダード・イノベーション」	お茶の水女子大学	一般
11	藤山真美子	2025 年 9 月	掛川西高校大学模擬講座ミニ大学	掛川西高校	一般
11	藤山真美子	2025 年 10 月	究極のパブリック!!!!!! ～トイレを通して考える、公共施設の在り方～	超図書館総合研究所	一般
11	藤山真美子	2025 年 10 月	第 2 回ひろがる工学・つながる工学セミナー：分野を超えて考える未来の街や建築デザイン	お茶の水女子大学	一般
11	藤山真美子	2025 年 10 月	JST/CRDS 科学技術未来戦略ワークショップ「ジェンダード・イノベーション」第 2 回	科学技術振興機構(JST) 研究開発戦略センター (CRDS)	専門職
11	藤山真美子	2025 年 11 月	池袋エリアプラットフォーム 第 2 回 MEET UP!!	池袋エリアプラットフォーム	一般
11	藤山真美子	2025 年 11 月	社会実験 IKEBUKURO25	池袋エリアプラットフォーム	一般

目標 1 1 に関連するアウトリーチ活動（3）

目標	氏名	年・月	活動名	主催者	主な対象者
11	藤山真美子	2025 年 11 月	第 41 回全国トイレシンポジウム 2025:すべての人に優しい鉄道・空港・高速道路・道の駅などのトイレを考える	日本トイレ協会	一般
11	藤山真美子	2026 年 2 月	水まわりから考える未来の豊かな暮らしへ：共創によるジェンダード・イノベーション	LIXIL・お茶の水女子大学	一般

目標 1 2 に関連するアウトリーチ活動

目標	氏名	年・月	活動名	主催者	主な対象者
12(8, 10)	斎藤悦子	2025 年 12 月	CSR 構想インターゼミナール大会 共通テーマ「ウェルビーイングと CSR」	経営倫理学会	一般、学生
12(4, 7,13)	斎藤悦子	2026 年 2 月	サントリー&SDGs 推進研究所合同企画 「BtoB リサイクルチャレンジ！！」	サントリーホールディングス株式会社、お茶の水女子大学 SDGs 推進研究所	学生
12(7, 9, 13)	矢島知子	2025 年 6 月	JACI/GSC シンポジウム座長	公益社団法人新化学技術推進協会	研究者
12(2, 3,13)	河寄唯衣	2025 年 4 月	令和 7 年度東京都特別区保健所栄養士会講演会講師	東京都特別区保健所栄養士会	専門職

目標 13 に関連するアウトリーチ活動

目標	氏名	年・月	活動名	主催者	主な対象者
13(4, 7,12)	斎藤悦子	2026 年 2 月	サントリー&SDGs 推進研究所合同企画 「BtoB リサイクルチャレンジ！！」	サントリーホールディングス株式会社、お茶大 SDGs 推進研究所	学生
13 (2,3, 4,15)	刑部育子	2026 年 3 月	日本ならではの「食」の体験を通した持続可能性のための幼児教育研究－「雑穀」から広がる食育実践とキャンパス緑化－	お茶の水女子大学 保育マネジメント研究会	一般、専門職
13 (2,3, 4,15)	刑部育子	2026 年 3 月	第 10 回お茶大こどもフォーラム シンポジウム 1 作って食べる生活～食・命・SDGs～対談	お茶の水女子大学 保育マネジメント研究会	一般、専門職
13 (3,4, 15)	刑部育子	2026 年 3 月	第 10 回お茶大こどもフォーラム 分科会 ポケット・ガーデンの取り組みを辿る 講師	お茶の水女子大学 保育マネジメント研究会	一般、専門職
13(7, 9, 12)	矢島知子	2025 年 6 月	JACI/GSC シンポジウム座長	公益社団法人新化学技術推進協会	研究者
13 (2,3, 12)	河寄唯衣	2025 年 4 月	令和 7 年度東京都特別区保健所栄養士会講演会講師	東京都特別区保健所栄養士会	専門職

目標 15 に関連するアウトリーチ活動

目標	氏名	年・月	活動名	主催者	主な対象者
15 (2,3, 4,13)	刑部育子	2026 年 3 月	日本ならではの「食」の体験を通した持続可能性のための幼児教育研究－「雑穀」から広がる食育実践とキャンパス緑化－	お茶の水女子大学 保育マネジメント研究会	一般、専門職
15 (2,3, 4,13)	刑部育子	2026 年 3 月	第 10 回お茶大こどもフォーラム シンポジウム 1 作って食べる生活～食・命・SDGs～対談	お茶の水女子大学 保育マネジメント研究会	一般、専門職
15 (3,4, 13)	刑部育子	2026 年 3 月	第 10 回お茶大こどもフォーラム 分科会 ポケット・ガーデンの取り組みを辿る 講師	お茶の水女子大学 保育マネジメント研究会	一般、専門職

目標 17 に関連するアウトリーチ活動

目標	氏名	年・月	活動名	主催者	主な対象者
17(4)	斎藤悦子	2025 年 5 月～ 2026 年 3 月	共助資本主義の実現に向けた大学連合 各種イベント参加	大学連合	一般

7. 学内 SDGs 推進活動

(1) THE インパクトランキングエントリー

THE インパクトランキングは、大学の社会貢献の取り組みを国連の SDGs の枠組みを使って可視化するもので、イギリスの高等教育専門誌「Times Higher Education (THE)」が主催している。本年度は本学として4回目のエントリーとなった。2025年6月に公表されたランキング結果において、本学の総合順位は「1001-1500位（世界126カ国2,318大学、日本国内68大学対象）」となった。

ゴール別の順位

Goal 3	1001-1500 位	(全体 1788 大学エントリー)
Goal 5	201-300 位	(全体 1559 大学エントリー)
Goal 6	401-600 位	(全体 1042 大学エントリー)
Goal 7	801-1000 位	(全体 1181 大学エントリー)
Goal 8	801-1000 位	(全体 1350 大学エントリー)
Goal 9	601-800 位	(全体 1156 大学エントリー)
Goal 11	401-600 位	(全体 1154 大学エントリー)
Goal 12	401-600 位	(全体 973 大学エントリー)
Goal 17	1001-1500 位	(全体 2389 大学エントリー)

ゴール別の順位では、Goal 3 は「1001-1500 位（全体 1788 大学エントリー）」、Goal 5 は「201-300 位（全体 1559 大学エントリー）」、Goal 6 は「401-600 位（全体 1042 大学エントリー）」、Goal 7 は「801-1000 位（全体 1181 大学エントリー）」、Goal 8 は「801-1000 位（全体 1350 大学エントリー）」、Goal 9 は「601-800 位（全体 1156 大学エントリー）」、Goal 11 は「401-600 位（全 1154 大学エントリー）」、Goal 12 は「401-600 位（全体 973 大学エントリー）」、Goal 17 は「1-1500 位（全体 2389 大学エントリー）」にそれぞれランクインした。

なお、Goal 5: Gender Equality（目標 5：ジェンダー平等を実現しよう）については、初年度から4年連続、国内大学で第1位の成果を維持した。本年度エントリーした項目は以下の9項目で、結果は2026年6月にTHE社が発表予定である。

本年度エントリーした目標

	Goal 3	すべての人に健康と福祉を
	Goal 5	ジェンダー平等を実現しよう
	Goal 6	安全な水とトイレを世界中に
	Goal 7	エネルギーをみんなに そしてクリーンに
	Goal 8	働きがいも 経済成長も
	Goal 9	産業と技術革新の基盤をつくろう
	Goal 11	住み続けられるまちづくりを
	Goal 12	つくる責任 つかう責任
	Goal 17	パートナーシップで目標を達成しよう

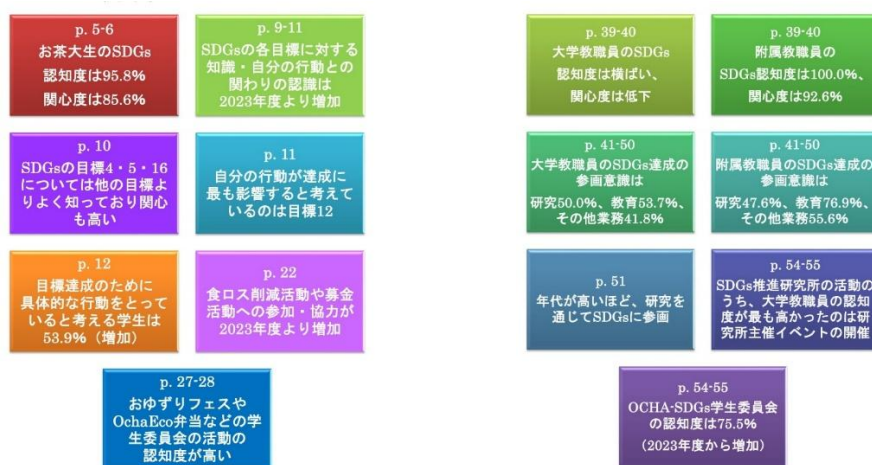
(2) SDGs 認知度調査

事業開始から 3 年間の SDGs 推進活動の成果を評価するために、再び認知度調査を実施した。調査内容は 2022-2023 年度に取得した項目に加え、これまでの研究所の学内 SDGs 推進活動に対する認知度も含まれた。

調査の実施概要

調査期間	実施方法	対象
2025 年 6 月	オンライン	本学学生（学部生・大学院生）
2025 年 12 月～2026 年 1 月	オンラインならびに 調査用紙の配布	本学及び附属学校園教職員

2025 年 6 月に本学学生（学部生・大学院生）を対象に調査を実施し、2025 年 12 月～2026 年 1 月には本学及び附属学校園教職員対象の調査も実施した。2026 年 3 月に結果をまとめ、公表した。



結果の概要（学生）

結果の概要（教職員）

学生・教職員とも、SDGs に対する認知度・関心度は横ばいであったが、参画意識は向上していた。また、学生委員会の存在や活動内容（開催したイベント）についての認知度は、学生・教職員とも高かった。この背景には、高校の探究活動等において SDGs を取り扱った経験を有する学生の増加に加え、本学における SDGs 関連授業の展開やカリキュラムへの組み込みが進んでいることが挙げられる。さらに、本研究所がこれまで実施してきた各種の SDGs 推進活動が学内に広く認知され、参加の機会として機能し始めていることも一因と考えられる。今後はこうした成果を一過性のものとせず、これまでの取り組みを一層加速・発展させることで、2030 年の SDGs 達成に資する持続的な行動変容につなげていく必要性が示唆された。

V. 学生委員の活動

2022 年度に発足した OCHA-SDGs 学生委員会は、2023 年度までの班制（ESD 班・環境班・食班）を解体し、2024 年度からはプロジェクトベースでの活動体制にシフトした。2025 年度も個々のプロジェクトに代表者を設け、プロジェクトメンバーで内容を推し進めながら、2022 度に結成された広報部と連携を図り、学生委員主体で各活動内容を広報した。

1. Sustainability Week 2025 開催

2025 年 6 月 16 日（月）～21 日（土）に他大学連携 SDGs イベントである Sustainability Week 2025 を開催した。同イベントは、SDGs を自分ごととして考える 1 週間にする 것을目的としている。昨年度に引き続き 2 度目の開催で、今年度は UTokyoGXSN（東京大学）、プラごみ減らし隊（東京農工大学）、阪大マイボトル推進プロジェクト Carry My Bottle（大阪大学）、OCHA-SDGs 学生委員会（本学）の 4 大学の学生組織が中心となってイベントの準備を進めてきた。各大学の特色を活かした企画をそれぞれ実施し、お茶大は SDGs 図書展示、おゆずりフェス、プラントベースに関するアンケートと展示を行った。



イベント概要

日時	2025 年 6 月 16 日（月）～21 日（土）
場所	本学図書館、生協、東京大学駒場キャンパス
目的	SDGs を自分ごととして考える 1 週間にする
参加団体	・ UTokyoGXSN（東京大学） ・ プラごみ減らし隊（東京農工大学） ・ 阪大マイボトル推進プロジェクト Carry My Bottle（大阪大学） ・ OCHA-SDGs 学生委員会（本学）

イベント詳細

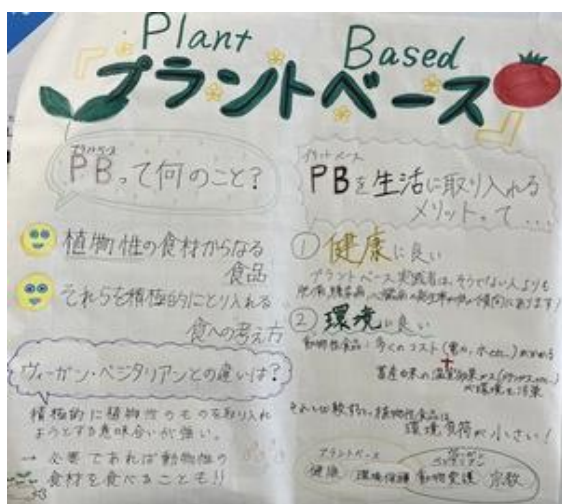
SDGs 関連図書展示	
日時	2025 年 6 月 4 日（水）～7 月 3 日（木）
場所	図書館西側新刊図書コーナー





本学図書館では、SDGsに関連する図書 20 冊が展示された

プラントベースドフード展示	
日時	2025 年 6 月 16 日 (月)～20 (金)
場所	生協 2 階



大学生協 2 階の展示



おゆずりフェス *こちらのイベントについての詳細は p.74 をご参照ください。	
日時	《不用品回収》2025 年 6 月 9 日 (月)～13 日 (金) 《フェス》2025 年 6 月 16 日 (月)～20 日 (金)
場所	《不用品回収》生協 1 階入口、図書館北エントランスに設置された赤い BOX 《フェス》晴天時→図書館前の広場 雨天時→共通 2 号館 102 (月曜日のみ共通 2 号館 101)

音楽で紡ぐ持続可能な未来 ＊最終日音楽イベント	
日時	2025 年 6 月 21 日（土） 13:00～16:00
場所	東京大学駒場キャンパス KOMCEE East 2 階 K211
主催	UTokyo GXSN Japan Sustainability Week
共催	Climate Live Japan
後援	東京大学 GX 戦略推進センター



最終日は、対面とオンラインで大学間交流イベントを行った。複数の大学や活動団体の学生や社会人が 50 名近く参加した。午前中は、各団体の活動報告を通して、今後どのようなアクションを起こせるかについて考える機会となった。午後は「Climate Live」という気候変動と音楽を融合させたライブが実施され、音楽を楽しみながら他大学の学生との関わりを作ることができた。

2. 干し芋の残渣活用のための意見交換会を開催

2025 年 6 月 4 日（水）、茨城県にある江戸川学園取手中学校・高等学校調理同好会代表生徒らが本学を訪問した。

規格外野菜プロジェクトチームは江戸川学園取手中・高等学校調理同好会の皆様、本学の Ochas ファームチームと意見交換会を開催した。

規格外野菜プロジェクトでは、Ochas のファームチームと協力しながら、調理同好会の皆様との協働を目指している。今回の意見交換会をはじめとして、両校のさらなる交流とアップサイクルの啓発活動への取り組みが一層深まることが期待されている。

今後は、具体的な商品企画や試作を重ね、地域に根ざした持続可能な食品開発を推進してゆく所存である。また、プロジェクトの成果を広く発信し、環境負荷の軽減と食品ロス削減の啓発にも力を入れていく予定である。なお、意見交換会の前にはキャンパスツアーを実施し、調理同好会の皆様に本学の雰囲気を感じていただける良い機会ともなった。



3. シェアリングサービスプロジェクト おゆずりフェス開催

OCHA-SDGs 学生委員会では、家にある自分では使わなくなったが、まだ利用価値のあるものを他者に使用してもらうことで、廃棄される品を少しでも減らすシェアリングサービス活動「おゆずりフェス」を 2025 年度は 2 回実施した。お茶大生から回収した服や文房具、日用品を学内で無料再配布することで、大学内での無駄な廃棄を減らし、リユースのサイクルを長くする場の提供を目的としたイベントである。



第3回 開催概要

開催期間	開催場所	実施内容
2025 年 6 月 9 日 (月) ～13 日 (金)	大学図書館入口 ならびに生協入口	回収活動 242 点回収
2025 年 6 月 16 日 (月) ～20 日 (金)	図書館前の広場	譲渡会「おゆずりフェス」 190 点譲渡

「第3回おゆずりフェス」では6月9日(月)～13日(金)の1週間、大学図書館入口と生協入口に回収BOXを設置し、お茶大生及び関係者を対象にして、家にあるが使っていない物の回収を行った。服やバッグ、文房具、雑貨等計242点のさまざまな日用品が回収された。

翌週の6月16日(月)～20日(金)の期間に図書館前の広場で第3回「おゆずりフェス」を開催した。開催時間が昼休みであることを鑑み、開催場所を図書館前という多くの学生が通るところに移したことで、これまで以上に多くの学生に集ってもらえた。



参加者アンケートでは50件の回答を得ることができ、今後の開催頻度についての質問に対する回答では、おゆずりフェスへの需要を確認できた。また、「このイベントをどこで知りましたか？」という質問に対し、「通りがかった」と回答した人が半数を超えた。今回は回収期間中だけでなく、おゆずりフェス開催場所にも直接不用品を持ち込めるようにしたことで、多くの物を回収することができた。回収物は合わせて242点で、190点の譲渡を行うことができた。



図書館前の広場で開催された第3回おゆずりフェスの模様

OCHA-SDGs 学生委員会は第1回～第3回のおゆずりフェスが参加者に好評だったことから、2025年度後期にもおゆずりフェスを企画し、12月8日（月）～12日（金）の期間に「第4回おゆずりフェス」を開催した。

第4回 開催概要

開催期間	開催場所	実施内容
2025年12月1日（月）～5日（金）	大学図書館北エントランス ならびに生協入口	回収活動 405点回収
2025年12月8日（月）～12日（金）	図書館前（晴天時） 共通2号館101 （雨天時）	譲渡会 「おゆずりフェス」 277点譲渡

不用品の回収は12月1日（月）～12月5日（金）に行い、服やバッグ、日用品、文房具、雑貨など合計405点を回収した。大学図書館と生協に設置した回収BOXには毎日たくさんの不用品が入れられており、このイベントのニーズの高さが感じられた。

翌週の12月8日（月）～12月12日（金）に図書館前の広場で第4回おゆずりフェスを開催し、前回の残りと合計した455点のうち277点を譲渡することができた。前回と同様に人通りの多い図書館前で開催したことで、多くの人に参加してもらえた。



参加者アンケートでは、「おゆずりフェスをどこで知りましたか？」という質問に対して、「通りがかった」と答えた方が75%であり、開催場所の重要性が数値からも伺えた。アン

ケートでは、「今までに行われていたおゆずりフェス・物品回収に参加したことがある」と答えた方が 50% に上り、おゆずりフェスの知名度がだんだんと上がってきたことが数値としても示された。

また、今回初めて、「おゆずりフェス」と並行して「都市鉱山企画」として不要な小型家電の回収を行った。「都市鉱山企画」は学内の学生・教職員から不要となった対象 8 品目の小型家電を回収し、文京区に引き渡すというもので、小型家電内の貴重な金属資源のリユースの促進を目的としている。おゆずりフェスがもともと「資源循環」をテーマにしていることに加え、「都市鉱山」という新たな概念への関心が高まっていることに着目し、今回開催を試みた。

おゆずりフェスが不用品の回収をする期間に合わせ、回収 BOX の隣に当企画の告知をした。そして「おゆずりフェス」開催中は、図書館前広場で対面での回収を行った。アンケートでは「都市鉱山企画」の開催を知っている人数が 33 人中 5 人という認知度の低さもあり、実際に対面での回収に訪れた学生はいなかった。最終的にはプロジェクトの学生メンバーと SDGs 推進研究所から集まったスマートフォン 2 台とウォークマン 3 台を、文京区のリサイクル清掃課に持参した。



不要な小型家電を 回収します！

お家に壊れたり、もう使わない小型家電はごいませんか？
中の金属部分を資源として是非リサイクルしましょう！

【回収対象品】

- ・携帯電話、スマートフォン
- ・携帯音楽プレーヤー
- ・携帯ゲーム機
- ・デジタルカメラ
- ・ポータブルビデオカメラ
- ・電子辞書
- ・卓上計算機
- ・ACアダプタ

【場所・日時】
図書館前(対面回収)
12月8日(月)～12日(金) 昼休み

※回収対象品のもの以外は受け取れません
 ※乾電池やボタン電池は取り外してください
 ※個人情報を含むデータは削除してください
 ※リチウムイオン電池を内蔵する製品は**バッテリー**を使い切ってください
 ※ACアダプタは**コード単体**では受け取れません

あなたが捨てようとしている
その服や文房具、
誰かにとっては必要かも？

おゆずりフェスとは？

お茶大生のみなさまがご提供
くださった品物を次の使用者に無料で
おゆずりするイベント！

お財布にも環境にもやさしい行動
を一緒にしませんか？

回収するもの

- 服 (洗濯したもの)
- 文房具 (新品または新品に近いもの)
- 日用品 (電化製品、危険物は×)
- 食器類

その他雑貨などなんでも！

【お問い合わせ先】
SDGs推進研究所
総合研究棟209 sdgs-office@cc.ocha.ac.jp

完全無料

第4回 おゆずり フェス 開催決定！

前回も大好評！
おゆずりフェスの第4回が開催されます！

不要品回収
12/1(月)～12/5(金)
回収BOX設置場所：図書館北エントランス
生協1階入り口付近

おゆずりフェス
12/8(月)～12/12(金)
昼休み(12:20-13:00)
開催場所：晴天時→図書館前
雨天時→共通2号館101
(月曜のみ102)

おゆずりフェスって何？
詳しくは別面をチェック！

OCHA-SDGs学生委員会

4. 文京区クールアースフェア 2025 に出展

pp.44-45 参照

5. 文京区内大学サステナビリティ関連取組のための交流・意見交換会へ参加

pp.45-46 参照

6. mottECO 普及イベントにてブース出展

pp.39-40 参照

7. 微音祭出店

2025 年 11 月 8 日（土）～9（日）に開催された微音祭にて、KIFC（微音祭実行委員会）とのコラボ企画として、2 日間にわたり学生委員によるホットチョコレート試飲を行った。来場者にサステナブルなチョコレートを使用した、温かいホットチョコレートを提供し、1 日あたり 60～80 杯を提供した。

「チョコレート旅行」をテーマに、チョコレートに関するクイズラリーも実施し、子どもたちを中心に多くの参加者から好評であった。また、チョコレートと SDGs に関するポスターを作成し、来場者が環境や社会に関する情報に触れる機会を提供した。さらに普段の委員会活動の様子を紹介する展示も行い、活動を身近に感じてもらえる機会にもなった。2 日間の来場者数は、1 日目が 208 人、2 日目が 174 人であった。



開催概要

開催期間	2025 年 11 月 8 日（土）～9 日（日）
開催場所	共通講義棟 1-103
実施内容	・ホットチョコレートの試飲 ・クイズラリー ・ポスター展示 ・委員会活動の展示

8. フードドライブ活動

今年度も 2024 年度に引き続き、各附属学校園におけるフードドライブの広報活動や、フードドライブを題材とした教育に OCHA-SDGs 学生委員会が協力した。また、大学フードドライブの実施にあたり、企画・運営・広報の実働を担った。全学で約 138 kg の食品が回収され、寄付された。



幼稚園	・保護者と協働して収集された食品の集計作業
小学校	・6年生を対象にしたフードドライブ事前授業への参加 ・5年生を対象にした給食の食べ残しに関する授業への参加
中学校	・ボックス設置・回収
高等学校	・活動内容の共有と交流 ・広報媒体の提供

2025年度は、附属小学校5・6年生を対象に、食を通じてSDGsや他者への思いやりについて考える交流授業を実施した。6年生では、10月のフードドライブを前に、「なぜフードドライブを行うのか」をテーマとし、参加の意義を自分ごととして捉えることを目的とした授業を行った。

フードドライブ開始当初は、「家庭で十分に在庫管理をしているため寄付できる食品はない」という声もあった。また、学校からは、食品の寄付を通じて支援や寄付に対する価値観を育

附属小学校6年生対象 ～フードドライブについて考えよう～

ボランティアに参加しました！

11:00～11:30

セカンドハーベスト・ジャパン 見学・ボランティア報告

12:00～13:00

食品を配りにくる方たちのご案内

実際に寄付されている食品から選んでみよう！

寄付する相手のことを考えて 食品を箱詰めるワーク

受取人には、自分が寄付したいものを入れてみよう！

授業の焦点:

寄付する・されるは対等な立場

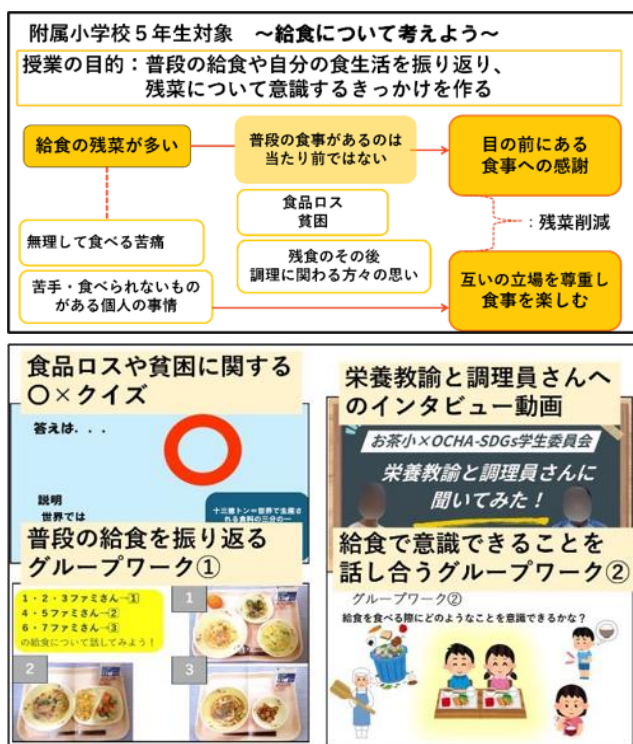
「おすそ分け」の価値観



む機会にしたいという要望が寄せられた。そこで、本授業では、寄付する・される関係を上下ではなく対等なものとして捉え、本学のフードドライブのキーワードである「おすそ分け」の考え方を軸に据えた。フードドライブに関するクイズや、寄付先であるフードバンクの見学・ボランティア活動の紹介を通して理解を深めた後、寄付食品を家族構成に応じて選び、箱詰めするワークを実施した。児童は栄養バランスだけでなく、開封時の楽しさや詰めやすさ、自分なら何をもらったら嬉しいかといった視点から工夫を凝らし、相手を想像して行動する「おすそ分け」の価値観を主体的に考えていた。

5年生では、給食の残菜をテーマに授業を実施した。残菜削減だけを目的とするのではなく、苦手な食べ物や発育段階など一人ひとりの事情を尊重しながら、「食べられることは当たり前ではない」という価値観を育むことを重視した。食品ロスや貧困に関するクイズ、給食写真を用いた自己理解のワーク、残菜の現状紹介に加え、栄養教諭と調理員へのインタビュー動画を活用し、給食に込められた思いや残菜削減の工夫を学んだ。授業のまとめでは、「給食を食べるときに自分ができること」を話し合い、「苦手なものにも一口挑戦してみたい」といった前向きな意見が多く聞かれた。

本活動は、子どもたちが多様な視点から考え、互いに学び合う姿は大きな学びとなった。一方で、グループワークで意見交換が十分に活性化しない場面も見られたため、授業運営の改善を進めるとともに、身近な食を入り口として、将来を担う世代がSDGs達成に向けた具体的な行動につなげられる食育活動を継続している。



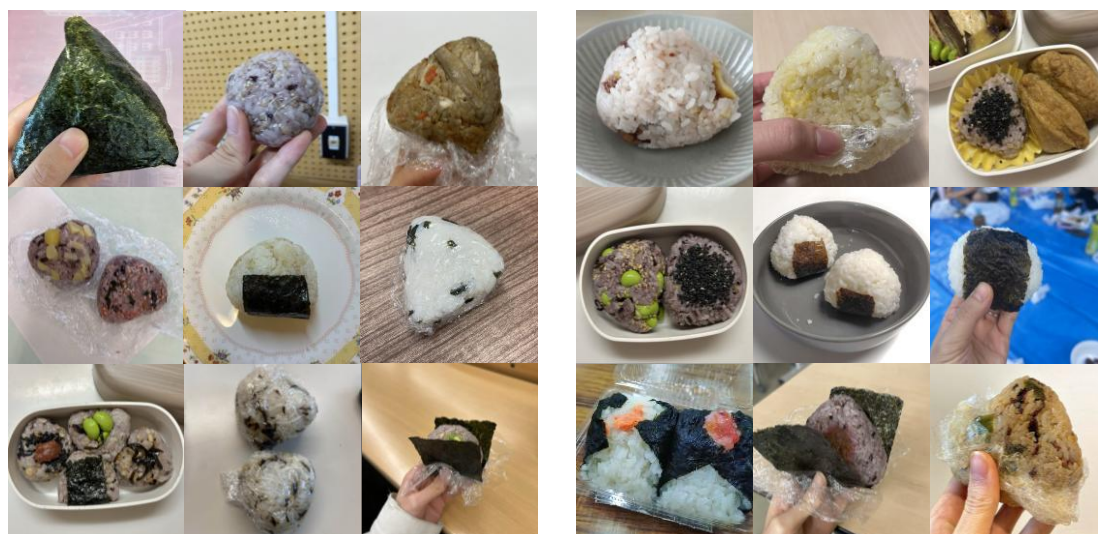
9. おにぎりアクション 2025 参加

2025 年 10 月 7 日から 11 月 30 日にかけて開催された「おにぎりアクション 2025」及び「おにぎりアクション FOR JAPAN」に参加した。

おにぎりアクションとは、「おにぎり」の写真を SNS (Instagram, X, Facebook)、または特設サイトに投稿することで、1 枚の写真投稿につき給食 5 食がアフリカ・アジアの子どもたちに寄付される取り組みである。飢餓や肥満、生活習慣病の解消に取り組む日本初の社会貢献運動団 TABLE FOR TWO が主催し、2015 年から毎年 10 月 16 日の「世界食料デー」を記念し開催されている。

OCHA-SDGs 学生委員は、昨年度に引き続き、本研究所の公式 SNS (X・Instagram) で写真を投稿した。期間中には 30 枚以上の写真が投稿され、毎日のように SNS におにぎりの写真が共有された。

世界の子どもたちへの支援になるだけでなく、学生自身も、本イベントを通じ、おにぎりを握る・美味しく食べるという喜びや楽しさを共有できた。また、学生委員会内でプロジェクトを横断した交流の機会となった。



10. マイボトルを持とうプロジェクト ウォーターサーバーサービスの展開

「マイボトルを持とうプロジェクト」は、学内のペットボトル使用量の削減を通じて環境負荷の軽減を図るとともに、学内における SDGs の実践を促進することを目的として活動している。

2024 年 5 月より本学消費生活協同組合（生協）と連携し、食堂マルシェへのウォーターサーバーの導入に向けた提案や運営面でのサポートを開始した。同年 11 月にはウォーターサーバー1 台を設置し、利用券（ステッカー）を購入した利用者がマイボトルへ給水できるサブスクリプション形式のサービスを開始した。ステッカーの価格は、生協とプロジェクトメンバーで相談のうえ設定している。

運営においては、生協が設備の維持管理および利用券販売を担い、OCHA-SDGs 学生委員会はステッカーのデザイン作成や広報活動や利用環境の改善に取り組んでいる。

2025 年度には、第 2 期利用券（2025 年 4 月～9 月）及び第 3 期利用券（2025 年 10 月～2026 年 3 月）の販売を実施した。第 1 期利用者から寄せられた意見を踏まえ、利用券の交換対応を可能とするなど運営面の改善を行った結果、第 2 期の利用券購入者数は 265 名となり、第 1 期（2024 年 11 月～2025 年 3 月）の 91 名から大幅に増加した。また、第 2 期の給水量は約 6,500L に達し、500ml ペットボトル換算で約 13,000 本分の削減効果があったと推定される。

さらに、第 3 期利用券では、第 2 期利用者からのフィードバックを反映し、ウォーターサーバーの利用方法や清掃方法に関する案内を改善した。その結果、第 3 期の利用券購入者数は 2026 年 1 月 22 日時点で 266 名、給水量は 2026 年 2 月 4 日時点で約 6,000L となり、500ml ペットボトル換算で約 12,000 本分の削減につながった。

また、授業「生命と環境 21 海洋環境と生物多様性」における活動紹介や研究所 Instagram での情報発信を通じて、本取組の周知と環境意識の醸成にも取り組んだ。

2024 年 11 月の運用開始から 2026 年 2 月 4 日までの総給水量は 15,491L に達し、500ml ペットボトル換算で 30,982 本相当のペットボトル削減効果が確認された。本プロジェクトは、学内における環境配慮行動の促進とマイボトル利用の定着に寄与する取り組みとして着実に成果を上げている。



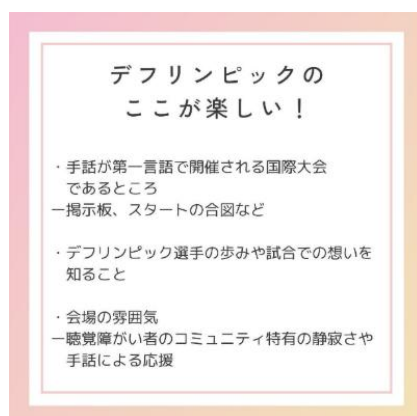
11. 手話べりプロジェクト 勉強会開催

手話を用いたコミュニケーションの機会の創出を目的とする「手話べりプロジェクト」は、2024年6月に開始された。手話べりとは「手話」と「おしゃべり」の2語を組み合わせた造語である。キャンパスにおける情報保障及びインクルーシブな環境形成の観点から、本取組を重要な実践活動と位置づけ、音声に依存しないコミュニケーションへの理解と実践を促進することを目的としている。手話に加え、指文字や筆談など多様な手段の活用も推奨している。

活動の中心である「手話べり会」は、参加者が気軽に手話で交流できる場として運営されている。会では、プロジェクトメンバーが基礎的な手話を紹介するとともに、参加者同士がペアで会話を行う形式を取り入れている。2024年7月以降は学内全体に対象を拡大し、昼休みの時間帯におおむね週1回の頻度で開催している。2025年度は合計39回実施され、継続的に参加できる機会が設けられた。

特に11月には、耳の聞こえない・聞こえにくい人たちの国際的な競技大会であるデフリンピックの開催に合わせ、関連する競技や手話表現を取り上げた特別企画を実施し、学内での関心を高める機会となった。

また、「手話べり会」に加え、手話を取り巻く社会的テーマに関するディスカッションや、手話を公用語とする飲食店の訪問、他大学の手話サークルとの交流など、多様な活動を展開しており、手話への理解を深めるとともに、参加者同士の交流の広がりにもつながっている。



実施概要

内容欄のページ番号は、『動画で学ぶ やさしい手話』（日本文芸社）の掲載箇所を示す。

回	日程	内容
1	5/9(金)	pp.1-27, p.89 天気、感謝、季節
2	5/13(火)	pp.28-32, p.81 謝罪、どこ行くの、出身地
3	5/23(金)	pp.33-39, p.83 忘れ物、ご飯関連、血液型
4	5/27(火)	pp.40-44, p.84 曜日、質問、干支
5	6/6(金)	pp.45-49, p.84 ～はできますか、～はどこですか、職業はなに？

6	6/10(火)	pp.50-54, p.85 疑問表現、好き嫌い、何人家族ですか
7	6/20(金)	pp.55-59, p.86 何、いつ、どこ、家族の職業
8	6/24(火)	pp.60-63, 87-89 どこ行きたい、～したい、天気
9	7/4(金)	pp.102-109 レストラン、病気
10	7/8(火)	pp.64-66, 95-99 どこ、誰、どんな人、買い物
11	7/18(金)	pp.67-70, 100-101 なぜ、食事
12	7/22(火)	pp.71-75, 90-94 どっち、いくつ、趣味
13	8/19(火)	pp.102-110 レストラン、病気
14	8/29(金)	pp.111-118 トラブル、交通、道案内
15	9/5(金)	pp.120-123, 166-168 アルファベット、職業
16	9/16(火)	pp.182-184 食べ物、指文字、数字の復習
17	10/17(金)	pp.102-110 レストラン、病気
18	10/21(火)	pp.111-118 トラブル、交通、道案内
19	10/31(金)	pp.120-123, 166-168 アルファベット、職業
20	11/4(火)	p.23,27,28,57,61,65,67,71 疑問形の表情、姿勢、挨拶など
21	11/14(金)	p.41,43,44,51 呼び方、指差し、すみませんなど
22	11/18(火)	p.9,30,31,39,42,45,64,128,195 ボランティア、敬意表現など
23	11/28(金)	p.34,99 応援表現（頑張れ、おつかれさまなど）
24	12/5(金)	指文字強化デイ（ゲーム）
25	12/9(火)	pp.20-34 挨拶、自己紹介
26	12/19(金)	クリスマス、アルファベット指文字
27	12/23(火)	年末年始、数字
28	1/9(金)	pp.36-44 食事、曜日、予定、わかる/わからない
29	1/13(火)	pp.45-54 期日、できる/できない、場所、好き嫌い
30	2/3(火)	pp.55-64, 144-145 疑問文（What,When,Where）、国名
31	2/13(金)	pp.65-75 疑問文（Who,Why,Which,How）
32	2/17(火)	pp.17-18, 78-84, 166-167 自己紹介、数字、職業
33	2/24(火)	ディスカッション会
34	2/27(金)	pp.84-94, p.126 干支、天気、趣味
35	3/6(金)	pp.95-105 買い物、食事、レストラン
36	3/10(火)	pp.106-115 病気、トラブル、交通
37	3/20(金)	pp.116-118, 120-125, p.128 道を聞く、単語集
38	3/24(火)	pp.129-138 単語集
39	3/31(火)	ディスカッション会

VI. 広報

1. 学外広報

(1) 農林水産省の Web マガジン「aff (あふ)」

農林水産省の Web マガジン「aff (あふ)」2025 年 10 月号で、OCHA-SDGs 学生委員会が取り組んだ食品ロス削減活動が取り上げられた。10 月号では食品ロス削減が特集され、「大学生の食品ロス削減企画に注目」というテーマのもと、本学本研究所及び OCHA-SDGs 学生委員会の食品ロス削減活動が CASE3 で紹介された。

附属学校園を含めた本学校内でフードドライブを実施していること、生協食堂昼食営業の売れ残りをお弁当に詰め限られた時間に限定数量で OchaEco 弁当として販売していること、セブンプレミアム「賢者のレシピ」にて OCHA-SDGs 学生委員会の考案した食品ロス削減レシピ (①、②) が公開されたこと、干し芋の残渣活用のための意見交換会を開催したことが取り上げられた。

※農林水産省の Web マガジン

「aff (あふ)」2025 年 10 月号「大学生の食品ロス削減企画に注目」

※OchaEco 弁当については、2023 年度事業報告書(p.78)に掲載。



【資料】

- ① 国立大学法人お茶の水女子大学 SDGs 推進研究所規則
- ② 国立大学法人お茶の水女子大学 SDGs 戦略会議規則
- ③ 各種イベント・案内ポスター
- ④ 2025 年度 SDGs 認知度調査 結果のまとめ（※PDF ファイルのみ）

お茶の水女子大学 SDGs 推進研究所
2025 年度 事業報告書

2026 年 4 月

発行：お茶の水女子大学 サステイナブル社会実装機構 SDGs 推進研究所

〒112-8610

東京都文京区大塚 2-1-1

Tel : 03-5978-2568

Fax: 03-5978-5766

E-mail : sdgs-office@cc.ocha.ac.jp
